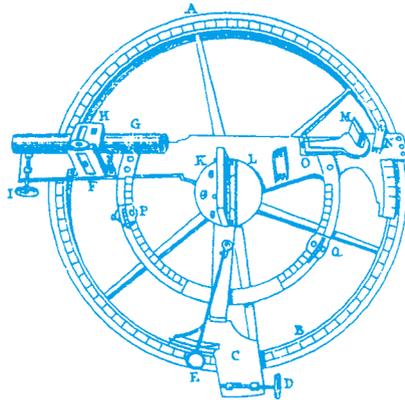


秋山財団ブックレットNo.22

いのちをつなぐ 未来のために
～ 伝えるのはいのちの輝き～

旭川市 旭山動物園 園長
坂 東 元



Akiyama Foundation Booklet

秋山財団ブックレットNo.22

いのちをつなぐ 未来のために
～ 伝えるのはいのちの輝き ～

旭川市 旭山動物園 園長
坂東 元

旭山動物園ホームページ

<http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/>

目 次

いのちと向き合う	3
動物から学んだ生命観	7
ありのままが素晴らしい	12
想いを伝える～ワンポイントガイド～	16
動物本来の素晴らしさを伝える～行動展示～	19
“いのち”をつなぐ～ウータン物語～	30
“いのち”を伝える～誕生の数だけ死がある～	45
質疑応答	55
注釈	59
講師経歴	63
賛助会員のご案内	65
ご寄附をお寄せくださる方に	68

●秋山理事長

今年の皆様よくご存知の旭山動物園の坂東園長を講師にお招き致しました。坂東様は、道内・国内での講演活動のみならず、ボルネオでの「恩返しプロジェクト⁽¹⁾」の中心者でもあり、また動物園内では「きりん舎・かば館⁽²⁾」の完成オープンを控える大変お忙しい時期にお越し頂きました事に、心より深く御礼申し上げます。

実は、ご本人から「当日はスーツ姿の方が良いのでは」との申し出がありました。私どものこだわりとして普段の作業着のままでお越し頂きたいと無理をお願い致しました。作業着の、特に足元が注目ポイントで、深い理由があると伺っております。

さて、私ども秋山財団は設立以来、生命（いのち）という視座を大事にしてまいりましたが、とりわけ3・11の東日本大震災、東京電力福島第一原発事故を契機に致しまして、財団の原点である生命科学というテーマをもっともっと更に深く掘り下げていくべきではないかという事で、当財団の理事会及び評議員会にて全員一致で、今年は講師を坂東様にお願いすることと致しました。

旭山動物園の持つ現場力と申しましようか、いのちの研究機関としても、教育の場としても非常に高い見識を築き上げている魅力とその秘密を、坂東様に語って頂きたいと思います。

ご出席の皆様方、短い時間ですが、どうぞひと時“いのち”というテーマと向き合い、その先にある新しい生き方を考え、今後の研究、活動のお役に立てればというのが、本講演を主催した財団関係者の願いです。

●司会（宮原常務理事）

秋山理事長ありがとうございました。それでは、旭川市旭山動物園園長の坂東元様の特別講演会を開催致します。演題は「いのちをつなぐ 未来のために ～伝えるのは いのちの輝き～」、お手元の封筒に特別講演会のパンフレットが入っておりますのでご覧下さい。

座長は学校法人酪農学園理事長麻田信二様です。先ほどの「受領者からのメッセージ⁽³⁾」で発表された学校法人酪農学園とわの森三愛高等学校の生徒さんも酪農学園、今年は学園創立80周年と伺っておりますが、講師の坂東様も酪農学園ご卒業というご縁で、麻田様に座長をお願いいたします。それでは、坂東様、麻田様宜しくお願い致します。

●座長 麻田 信二 様（学校法人酪農学園理事長）

只今ご紹介を頂きました経緯で、本日、坂東園長の特別講演会座長を務めさせて頂くことになりました。座長の職として講師の紹介ということですが、秋山理事長から詳しくご紹介頂き、またお手元のパンフレットにも掲載しておりますので



省略させていただきます。できるだけ坂東園長のお話を皆さんに聞いて頂きたいと思います。

また、講演のあと若干の質疑の時間も取りますので、ぜひ皆様方、聞いてみたいと思われたことをご発言下さい。それでは坂東園長、宜しくお願い致します。

●坂東 元 園長 いのちと向き合う



旭山動物園の坂東です。
今日は宜しくお願い致します。
(拍手) 私は背広を着るのは年に何回かありますが、背広姿は少し苦手で、普段の作業着姿ですと気楽に話せますので、今日はこの格好にさせていただきました。
先ほど、秋山理事長のお話

にありました私の足元ですが、靴下の中にズボンの裾を入れています。いつもこのスタイルについて聞かれますが、動物は檻の隙間から手を出してズボンの裾を引っ張る事が有ります。檻に入っている時にも裾を引っ張られて何度も転んだ経験が有りまして、このスタイルにしています。

旭山動物園というと、「廃園寸前の動物園がよくぞここまで来た」とい

うサクセスストーリーがあって、色々な事が話題になる動物園です。しかし私達としては、旭山動物園を有名にしたいとか、お客さんにたくさん来て頂きたいと考えて来たのではなくて、動物達の素晴らしいさを伝えたいと思い取り組んで



きた結果が、たまたま観光的な意味でも成功したと言われるようになったと思います。旭山動物園が素晴らしいという事ではなくて、動物達が素晴らしいというだけの事です。それを少し先んじて、少し違う視点で伝えて来たという事だと思います。

先ほど、どなたかが仰っていましたが、私も実学に結びつかない科学は一体どこに向かうのかと、ずっと気になり考えて来ました。私は獣医なので、科学的な視点を持ちつつも、それでも生き物は科学だけでは、完璧には説明し切れないものだと思います。私達は分かっている事を組み合わせ、コンパクトにまとめているので、何か全部分かったかのような気になっているのではないのでしょうか。分からない事はたくさん有ります。だからこそ、私達の知っている事をどの様に活かしていくのか、と言う視点が大切だと思います。

幼い頃から生き物を飼っていましたが、ただ好きなだけでは“いのち”を守る事も、助ける事も出来ないことを何度も経験して、獣医の世界を目指すようになりました。

子供の頃は身近なペット、セキセイインコやイヌ等の生き物達を通して

“いのち”を見つめていました。獣医になるための大学受験は、共通一次試験が始まって2年目ぐらいの年でした。最初は、帯広畜産大学を受けたのですが合格しなくて、1年間浪人して酪農学園大学に入りました。当時は2回試験があり1回目で落ちてでも自分の試験結果が全部送付されて来て、その1カ月後には2回目の試験がありまして、そこで合格して酪農学園大学に入学する事が出来ました。

私は、どちらかと言いますとイヌやネコよりも、ほとんど獣医に診てもらえない小鳥とか、メジャーではない動物達の診療が出来る獣医を目指していました。酪農学園大学は、今でこそ幅広く多方面に亘る人材育成に取り組んでいて、むしろ小動物、イヌやネコが中心になっている傾向もありますが、当時はまさに大学名の通り“酪農”学園大学で、毎日ウシを学ぶ事しかない大学でした。毎日ウシ、ウシ、たまにブタと言う感じで、結局大学6年間はほとんどウシしか診る事がなく、アツという間に過ぎてしまいました。

ただ、その6年間で医学的なこと、科学的なこと、生理学的なこと、家畜のことをすごく学びました。当時、^{かくやま}角山という所に^{とじょう}屠場があり、私は寄生虫の研究室に所属していたので、研究材料を取りに屠場に通っていました。家畜というのは、何千年も掛けて人間が作り変えてきた、ある意味で奇形を固定化した生き物達でもあります。ブタですと、半年ぐらいしか“いのち”がないのです。半年後には食肉になっていきますから、死の恐怖に対して非常に鈍感な生き物なのだろうと私は考えておりました。

ところが屠場に行くと、殺される順番を待っているブタとかウシがたくさんいて、屠場の中ではブタが悲鳴をあげたり、ウシの吠える声が響いて

いました。順番を待っているブタ達もやはりひどく目が血走っていて、当たり前ですが、ブタも生きたいのです。どの生き物も当たり前で生きていたいの、それが強制的な死で終わっていく。

私達はその現実をずっと目の当たりにして、人間は他のいのちを奪って生きていること、その死の上に私達の存在があり、昨日食べたブタの分子が今日の私の体を構成していること。食べ物は粗末には出来ない、美味しいとか美味しくないとか、「こんなのは、まずいから食べられない」等と、言うものではないこと。“いのち”を頂くという意味をしっかりと理解して食べなくてはならないこと等を、本気で学んだ大学6年間でした。

自分の“いのち”、自分が生きているという事は、自分だけで生きているわけではありません。しかし、今の社会は、集団というよりも個の時代になってきて、個の権利とか、個の安全とか、全てが個で完結する形の社会が作られています。その中で、他者との関わりが見えなくなっています。私達日本人が、食べ物を安全という基準だけで捉えてしまう風潮があり、果たして食べ物に“いのち”を感じられるのか、“いのち”をつなぐという感覚が育っていくのかととても不安に感じています。

多分、これからの10年は、今までの10年とは全く違う10年となって行くと思います。先ほどの高校生達の発表を聞いて、これからの社会の中心を動かし次の世代を作り上げて行く子供たちは、私達の世代とは違うのかも知れないと感じました。これからの10年は、価値感やものの見方を変えていかなければならない時代になるのだらうと思います。

動物園は、以前はフィールドを現場にしている方からは非常に嫌われる場所で、動物をコレクションして見せ物にしていると批判されていました

し、特に動物保全を行っている方達は、なかなか相手にしてくれなかったのですが、最近是一緒に取り組ませて頂いています。野生動物の保全活動をされている方達、例えばヒグマの研究、シマフクロウの研究など素晴らしい研究者の方達はたくさんいらっしゃいますが、その研究の先に果たして何かあるのかが、共通の課題なのではないでしょうか。研究をしました、それでは次に何を目標にしていくのかが、なかなか見えない時代になってきているように思います。研究で知った事をどの様に私達の暮らしの価値観の中に取り入れていくのか、そういう事を考えていかなければならない時代になってきたように感じています。

動物から学んだ生命観

私は、実学的な事ばかりを実践して来て、科学的な話はあまり得意ではありませんので、旭山動物園の理念や、私達スタッフの想い、動物達の“いのち”のつなぎ方、あるいは死の迎え方をお話し致します。

私は酪農学園を卒業して、身近にいるペット、或いは食肉になっていく畜産動物を身近に感じながら獣医になりましたが、就職の段になり、たまたま旭山動物園に獣医の空きが出来たとお誘いを頂きました。当時は本当にボロボロの動物園で、「あと数年でなくなる動物園かも知れないけど、来るか？」と、はじめに言われたのですが、「とりあえず行きます」と返事をして就職致しました。

私は、就職は決めましたが、実はあのような場所に動物を閉じ込める動物園はあまり好きではありませんでした。しかし、動物園の中で初めて、

人間が作り出してきた生き物ではない、人間のために作ったものではない野生の生き物達の事を知りました。動物園で飼育しているから家畜やペットの延長線上に考えられる方も多いのですが、野生動物としての本質的なものは変わっていません。檻の中で飼育されていてもやはりライオンはライオンで、ゾウはゾウです。頑なな生き方で、何かを求めないし、何かをうらやまない。淡々と生きる生き方で、それが本当に素晴らしく、スズメでもカラスでもどんな生き物でも横並びで素晴らしいと教えてくれました。

この感動が、私の原点であり出発点ですが、今日はこの話からさせていただきます。

私は獣医として、当然、治療すること、延命すること、助けること、痛みを取ること、そういう事が、絶対「善」と言う感覚で医学を学んで来ま



原 点

自分が思いもしなかった生命観があること。

相手を知ること、思いやるとはどういう事なのか？

痛み、苦しみも受け入れる生き方。ぶれることなく、うらやむことなく、自慢することなく生きる純粋さ、気高さ、尊さ

古くボロボロになる動物園。「つまらない！ラッコいないの？
珍しい動物いないの？」減り続ける来園者数

僕たちには飽きることのない素晴らしい「普通の動物」たち

施設は古くても、お金がなくても、お客さんに「みんな素晴らしい生き物たちなんだ！」と感じて欲しい！

話すことはお金がなくてもできる...ワンポイントガイド

「思いを伝えること・具体化すること」

Asahiya Zoological Park

〈提供：旭川市旭山動物園〉



〈提供：旭川市旭山動物園〉 カミが急におしっこが出なくなり、レントゲン撮影の結果、膀胱の中に小さな石が見付かりました。外科的に取れると判断はしたのですが、動物園の動物は直接触る事はなかなか出来ないもので予後管理は非常に難しく、老オオカミの年齢・園内設備等も考慮して外科的治療は断念し、点滴による内科的治療方法を選択しました。「1週間から10日も点滴すれば小石も溶けるであろう」と、私は獣医として、治してあげようという思いだけで治療に掛かりました。

動物が本当に素晴らしいと思うのは、人と根本的に違うのですが、自分が嫌いでも、自分にとって全く不愉快なものでも、相手の存在を認める事が出来るころだと思えます。つまり、食べる、食べられるもの同士が同じ空間を共有して生きていく事が出来ます。

しかし、動物は飼育係を存在としては認めてくれますが、これ以上接近してはダメだというラインは明確に持っていて、私達が扉を開けて檻の中に入る事は出来ません。

点滴治療にはまず全身麻酔が必要ですが、オオカミに、「はい、注射で

す！」とはいきません。どうするかと言いますと、吹き矢を使い麻酔をかけます。吹き矢は、ロックタイプのシリンジ（注射筒）を改造して私達が作りますが、それを飛び道具にして麻酔をかけて、寝ている間だけ治療をし、動物が起きそうになれば、直ぐに全部の注射針を抜いて檻から出て来ます。

今でこそ若いスタッフに現場を譲っていますが、当時、私はこの講演会場の一番後ろの席ぐらまでは吹き矢を使い麻酔をかけられました。ただ、サルは難しかったです。サルは非常に動体視力が良くて、飛んできた吹き矢を“ピャッ”と取ります（笑）。それで“ポイツ”と捨ててしまうので、あの手この手でサルの目をごまかしながら、違う方向に注意を向けておいて吹き矢を飛ばす方法で麻酔をかけました。

さて、老オオカミの話に戻ります。吹き矢を使って老オオカミに点滴をし続けて4日目ぐらいには、おしっこが出るようになりました。あと4～5日も続ければ、全快するとの見通しが立ち、私はとても良い事をしていて考えていました。しかし、動物の側にすると、本質的な部分では信用していない人間の前で意識を失うことは死を意味する事なので、オオカミには恐怖の連続だったのでしょう。動物園という施設は、人間が一方的に管理の出来る施設ですから、動物の側には抵抗する余地はありません、そもそもが一方的なのです。オオカミは吹き矢を持った私の姿を見てガタガタと震え出してしまい、吹き矢の筒が自分の方に向いた途端、口から泡を吹いて卒倒してしまうようになりました。それでも、檻の中に入り治療する為に吹き矢を使っていました。そして治療を続けて、1週間目ぐらいの時に、その吹き矢が刺さったショックでオオカミは死んでしまいました。

その時に、私はハタと一体何をしてきたのだろうかと自問自答しました。私は、医学を習得しその知識を使うために相手がいると、自分では絶対に良い事をしていると思い込んでいました。ところが良く考えてみると、それはとてもおかしな事です。生き物は生まれた時から死に向かって生きている訳で、どの様に医学を駆使しても最終的には死で終わります。その生き方に対して、どうサポートしてあげられるのか、所詮医学なんて、その程度の事しか出来ないのではと考えるようになりました。治療した結果を自分の成果にするのではなくて、どう動物達の手助けをしてあげられたのかという視点で見るとなりました。私自身が考えてもいなかった生命観、価値観が存在するという事が分かり、これは人間でも、私の研究対象でも一緒なのだと思うのですが、相手を知ること、本当の意味で相手を思いやるとはどういう事なのかを考えるように変わりました。

この会場、この同じ環境の中に皆さんが一堂に会していても、同じ景色を見ている人はいないと思います。一人ひとりが注目している場所は違い、やはり当然の事ですが、異なる感性・感覚の中で違うものを見ている。だからこそ、私達は動物を対象にしますが、動物の側に立って感じてあげないと本質的な意味での医療は出来ないと考えます。

人間以外の動物は医療・治療・延命という概念がないので、痛み・苦しみを受け入れて生きる、そしてそれに耐えられなければ死で終わります。この当たり前の事を受け入れて生きるという生き方が動物にはある事を知りました。ですから、動物達はぶれると言う事がなく、誰かをうらやむという生き方をしないし、自慢する事もしない。これはとても尊くて、気高くて、素晴らしい事であること、それを私たち旭山動物園の獣医も飼育係

も担当者も、みんなが共有出来るようになっていきました。

一方で、当時の旭山動物園は“狭い”、“臭い”、“かわいそう”の三拍子揃った、つまらない動物園、珍しい動物のいない動物園だとお客さんは思っていました。「面白い、面白くない。可愛い、可愛くない。珍しい、珍しくない」と言う、本当に薄っぺらな人間の感情の中で、動物達は評価され続けていたのです。しかし、動物達に関わっている私達は、スズメでもカラスでも、どの動物でも横並びで素晴らしいと感じながら仕事をしていました。

私が就職した頃、「あと数年で動物園はなくなる」がいよいよ現実味を帯びていて、予算の時期になると毎年、「来年は〇〇観光に売却されるらしい」と言う噂話ばかりで、先の見通せない不安な日々を過ごしていました。しかし、私達は動物達の素晴らしさをどのようにして伝えられるだろうか、夢中になり考え話し合いを続けていた時代でもあり、現在の旭山動物園の土台を創った時期と考えて間違いないと思います。

ありのままが素晴らしい

以前は、動物園というと、大人が自分達のためというよりは、学校の遠足や子供や孫を連れて訪れる場所でした。旭山動物園は老朽化が進みボロボロになっていて、「本当につまらない」と言われてお客さんは減り続けていましたが、やはり遠足の定番の場所では有りました。先生が子供たちを引率し見せて歩くのですが、当時の日本ではコアラとラッコが大ブームでした。コアラは北海道には来なかったのですが、ラッコは水族館にたく

さん入って来ました。その水族館は「ラッコ！ラッコが来たから見に来て！」と大宣伝をします。マスコミでもラッコばかりが宣伝される。そうすると、ラッコが動物園の価値基準となります。旭山動物園に来たお客さんからも「ラッコはいませんか」と良く尋ねられました。私が「いません」と答えると、「確かにここじゃ無理ですよ」と変に同情されて、カチンと来た事もありました。

人間は、その社会性から来る特徴として絶対的な評価ではなく、相対的なものの見方をします。例えば、勉強が出来る人がいると、勉強が出来ない人。お金持ちがいれば、お金持ちではない人、貧乏な人。というように、相対的に比べてものを見てしまう傾向が有ると思います。

ラッコが大人気となったその正反対がアザラシでした。アザラシは、昔からどこの水族館にもいました。旭山動物園にも開園当初よりアザラシやゴマフアザラシがいたのですが、アザラシの施設に来たお客さんに、「ラッコはいないのですか」と聞かれる始末。

私には、忘れられないアザラシの思い出が有ります。それは、子供たちを引率して動物園に来ている先生と好奇心に満ち溢れている子供たちとの“価値観”がぶつかり合う光景で、毎年のように繰り返されていました。

遠足で、子供を引率した先生がやって来ます。先生は毎年来ているので、もう見飽きたアザラシ、知っているつもりになっているアザラシですが、初めて見学に来た子供たちはそういうフィルターが掛かっている目でアザラシそのものを見る事が出来ます。ラッコとの比較ではなくアザラシを見られます。アザラシを見ていると本当に不思議で、子供たちは夢中でアザラシを見続ける事が出来るし、たくさんの事を発見します。でも、その

引率の先生は予定の時間が来ると「次に行きます」と促し、子供たちが「もう少し見たい」とごねると先生も渋々認めますが、時間に追われる先生はついにはイライラした声で「そろそろ次に行くよ!」となります。子供はずっと見ていられるのです。そして、子供たちがどうしてもその場を離れようとしないうちに、先生の発する言葉はほぼ決まっています、「これはラッコではないよ、ただのアザラシだよ」という言い方をします。そして、子供たちを次のコーナーに連れて行きます。

私には悔しかった。子供たちはアザラシそのものに感動し見続けていました。ところが、先生が「これはラッコではないよ、ただのアザラシだよ」と言った瞬間の子供たちの反応が、私は残念でなりません。素晴らしいと思って見続けていたアザラシを、先生が掛けたひと言で子供たち自身が「なんだ、ただのアザラシだったのか」と言いながら、その場を離れてしまいました。それが、先生、つまり大人の価値観が子供に移った瞬間だと思います。その子供の中ではアザラシへの興味はそこで終わり、一瞬にして大人の価値観が子供に移ってしまうのです。

誰もが相当の危機感を持っていると思いますが、今の社会環境も、こうしてしまった原因は大人達に有ります。今の子供たちが、私達と同じ価値観を持って大人になったのでは、社会は良く変わる訳はない、むしろ駄目になっていくしかない。だからこそ、子供たちが素晴らしいと思った事を思い続けさせてあげる。それが今、私達大人が一番しなければならない事だと強く感じています。子供たちが素晴らしいと感じたものは素晴らしいで良いと思うのです。大人が考える「良い子」にするために、大人の価値観を子供に押し付けることを良い事とする社会環境に憤りと悔しさを感じ

ます。

以前はそれほど有名な動物園ではなく、私も獣医に加えて飼育も行っていました。飼育係ときどき獣医と言う立場で餌を持って歩いていた時に、「ただのアザラシだよ」と言った先生の言葉が聞き捨てではなくて、先生を追い駆けて行き「どこがただのアザラシなのか、説明して欲しい」と迫って喧嘩をした事も有りましたね。

一体誰が、ただのアザラシにしてしまったのか。実は、その責任は“いのち”を預かっている側に有るのです。日本の動物園、水族館は、舶来のものに価値を求めて来た時代が続いて来て、特に動物に関しては他との差をつけて見せる。つまり、「当園にしかない動物だ」と大宣伝しながら、舶来の珍しい動物達を見せ続けて来てしまった責任は、動物園、水族館側にあると私は思います。

この会場にペンギン1羽を持って来てお見せしたら、皆さん全員がペンギンと言えると思います。しかし、毎日見ているはずの野鳥をお見せしても多分9割以上の皆さんは、自信を持って野鳥の種類を言う事は出来ないのではないのでしょうか。身近に生きているものを全く知らない。海の向こうのものばかりを見続けて来て、それで自然を大切にするとか、環境を大切に、“いのち”を大切に、と言っても果たして実効は有るのでしょうか。相手を知らなければ、相手の生き方を知らなければ、大切にする方法すら分からない。大切にする気持ち、接点すら生まれないのではないかと思えます。

私は、間違った“いのち”の見せ方をして来た動物園、水族館は非常に重い責任を背負っていると思っています。“いのち”はモデルチェンジ、

マイナーチェンジは出来ません。それを「ラッコは素晴らしい」、その陰で「ただのアザラシ」と言ってしまう、カラスは害鳥と言うイメージを人間が作ってしまった。ありのままの“いのち”が素晴らしいのです。いのちに優劣をつけてしまうこと、やはりそれは悔しいことでした。

想いを伝える～ワンポイントガイド～

その様な状況の中で、旭山動物園はなくなろうとしていましたが、私達スタッフは毎日、勉強会を続けておりました。それは、仕事が終わってから毎日、必ず起承転結のある発表を全員持ち回りで行う



勉強会でした。発表の中で「このまま動物園がなくなっても良いのか」と言う話が良く出ていて、私達が動物の素晴らしさを感じていてもお客さんに伝わってはいませんでした。結局、「動物がつまらない。お荷物の動物園はなくしてしまえ」が、周囲の方々の大半の意見でした。動物は自分の事を「素晴らしい」とは言ってくれませんので、動物に関わっていて動物の素晴らしさを実感している私達が架け橋となり、ひとつでもその素晴らしさをお客さんに感じて頂こうと、様々な話し合いを本当に一生懸命にしました。当時は、1万円の修繕費ですら支出の出来ない動物園でしたが、「話をするだけならお金は掛からない」と言う事で、20数年前の事ですが、飼育係が表に出てお客さんの前で行うワンポイントガイド⁽⁴⁾を始めました。

これは画期的というより、当時の常識ではあり得ない事でした。飼育係の仕事は動物の飼育であり、お客さんの前で話をするのは本来の仕事ではないし、何よりも当時の飼育係は、本当に人間嫌いな人が多かった（笑）。飼育係が変わらなければ、動物を守る事が出来ないと認識したので、このような場でも講演を行っていますが、私も正直に言いますと、やはり人間は面倒臭くて嫌ですね（笑）。飼育係は「動物のためなら苦勞をいとわないが、人間は嫌い」と言う人達の集団でしたので、誰がワンポイントガイドを実施するのかをめぐっては大変な議論となりました。

旭山動物園は、一般のお客さんには、すごいプロ集団と思われがちです。しかし、実際には私自身も獣医として動物園に就職しましたが、大学で結局はウシとブタ以外は見ていないですし、動物園の動物については何も知りませんでした。表面的には分かるのですが「ライオンの正常なウンチ」と言われても全く分からない、そういう意味では素人でした。旭山動物園の場合、飼育係は最終学歴が高卒までの方が就職する職種です。今でこそ人気はありますが、以前の動物園は正月もお盆もない、いわゆる3Kの職場で、就職したいと希望する人はいませんでした。欠員が出て飼育係の補充はなかなか出来なくて、旭川市の採用面接で「家でネコを飼っていました」等と口走ってしまうと、「この人は動物園！」と言う感じで配属が決まっていました。冗談では有りません、本当の話です。今、旭山動物園の軸となり頑張っているスタッフは、まさにそのような配属でした。

旭川市役所に就職したものの、動物園に配属が決まり、4月1日の初出勤日に「市役所を辞めます」と言って出勤しなかった人間が、周囲から「初日に辞めるのはないだろう、一度仕事をしてから考えてみなさい」と

説得され、現在、飼育係の中心となり頑張っています。高校を卒業して直ぐに就職し、スズメのその字も分からない。その人間が、真剣に“いのち”と向き



合っていく中で、スズメ1羽に悔し涙を流せるまでになる。更に5年もすると、研究会や学会でも大学院卒の方と肩を並べて発表出来る迄になるのです。

今日は、この事もお伝えしたいのです。やはり、生き物が持っている力は本当に大きく、私達は、動物達に育てられているとつくづく実感しています。旭山動物園はそういう人間の集団です。東京では、大卒者だけを飼育係として採用している動物園もありますが、私達は全く負けている気はしません。いのちとの向き合い方、何と向き合いどこに価値を見つけて取り組むのが、飼育係として何よりも根源的に大事なことだと、私は思います。

旭山動物園では飼育係は就職した年でも、日曜・祝日（13時30分頃から）に行っている「ワンポイントガイド」や「もぐもぐタイム⁽⁵⁾」等で、自分達が学んだ事を来園者の方々とにかく還元出来るかを、自分達の仕事として試す機会を与えられます。順番はあみだくじで決めるルールですから、4月に就職したばかりの人間に当たる事もありますが、それでも順

番は変えずに行います。知識・経験の少ない中で、むしろ知識の豊富なお客さんがたくさんいる状況で実施しますので、当然ですがほとんど話は出来ません。質問責めに合うと何も答えられなくなりますが、就職して1カ月目の飼育係でもひと月分の一生懸命さが伝わればそれで良いと、自分の言葉で、自分のスタンスで、自分の感性で精一杯伝えるという事を学んで欲しいと考えていて、それが、必ず力になっていくと思っています。この取り組みで入園者が増える訳ではありませんが、心から旭山動物園を理解して下さる方、例えば毎週足を運んで下さる方、長く下支えして下さる方が育って来たのは、20数年前から取り組んで来たこのワンポイントガイドなどがベースになっているように思います。

動物本来の素晴らしさを伝える～行動展示～

「つまらない」と言われたままで終わる事は出来ないとスタッフ一丸となり取り組んできた中で、ようやく最も古くなった施設から建替える予算がつかしました。よく、旭山動物園は新しい動物をたくさん連れて来たように言われますが、基本的には動物達の引越ししかしていません。私達は、誰にも振り向いて頂くことの出来なかった動物達だけで挑んで来た事を、ここで改めてお伝えしておきます。

さて、最初に建替える事になったのは、猛獣類の施設でした。ここは震度2～3程度の地震で壊れるのではないと言われるくらいのひどい施設でした。トラやライオン、ヒョウが檻の中にいるから、お客さんは安心して見っていますが、実は、鉄筋が腐って地面の中にはなく動物が穴を掘れ

ば外とつながってしまう、その様なギリギリの状態でした。サル山は壁が倒れてきて、いつ倒壊してもおかしくないほどの施設でしたが、ついに建替える予算がつかしました。

リニューアルにあたって、私達が大切にしたい二つのコンセプトについてお話致します。その当時の日本の動物園では、トレンドを取り入れて目先を変えたブーム的なものを追うというスタンスが続いていて、再整備した立派な動物園がたくさん出来ていました。先ず考えたコンセプトは、動物に関わる私達が長く愛し続けられるものを大切にするという事です。その原点は、私達が動物園内の生き物の日常の暮らしや営みに日常的に関わり続けているので、生き物達の素晴らしさを一番良く知っている事です。お客様に“うける”かどうかと言う視点ではなくて、私達が素晴らしいと

「つまらない」では終われない
～「行動展示」生まれる！～
古い施設を建て替える予算がついた！
↓
僕たちは飽きることがない動物たち。僕たちスタッフの価値観、スタンスの中で来園者に観てもらおう！
↓
●それぞれの種がそれぞれの種として一生を送れる環境を整えてあげよう！●
「ありのまま」が一番美しいはず！



Asahiya Zoological Park

〈提供：旭川市旭山動物園〉

考えるものをお客さんに共感して頂くスタンスで考えるようにしました。つまり、例えばスズメに飽きたから何か違う鳥に代えようとの発想は持たないと言う事です。これは今まで日本はもとより、世界にもあまりない発想でしたので、旭山動物園に、日本初、世界初の施設が次々に生まれました。私達の中では必然の結果として誕生した施設でしたが、周りから見ると全く今までの価値感にはないものが次々と出来たという驚きの印象が強烈に有ったようです。皆さんは簡単な事と思われるでしょうが、これこそが、科学を始め様々な分野の事が全て関わらなければ実現できないコンセプトでした。

動物園は、所詮、人のエゴで作った場所に生き物を閉じ込めていますので、動物園の動物達、例えば旭山動物園の動物が幸せというのは絶対に嘘です。しかし、私達は“いのち”を預かっているので、その“いのち”に対する責任の取り方とは何なのかと考えると、やはり、“それぞれの種”が“それぞれの種”として一生を送る事の出来る環境を作る事だと思っています。例えばキングペンギンは、ペンギンではなくてキングペンギンとしての一生を送る事の出来る環境を作ってあげようという視点です。このことも、結構難しい事ですが、様々なデータや私達が日常的に積み上げ構築して来た経験があれば、必ず実現出来ると確信しておりました。

もうひとつのコンセプトは、動物達のどこに感動して欲しい、どこで素晴らしいと感じて頂きたいのかという点です。芸をすとかショーをすと言う事ではなくて、動物達のありのままの姿の中に、本来の素晴らしさがある事を感じて欲しい。この二点を基本コンセプトとして、リニューアルする新しい施設を考えました。

最初にリニューアルした施設が、「もうじゅう館⁽⁶⁾」でした。「もうじゅう館」はヒョウが頭上において、お客さんが真下から見上げる、今までとは全く違った角度から観察出来る檻にしまし



〈提供：旭川市旭山動物園〉

た。当時のトレンドは檻を使わずに、ランドスケープ型⁽⁷⁾、環境再現型の施設が絶対だと言われておりまして、檻がなく景色が広がっている所に動物がいる造り方でした。しかし、それでは動物とお客さんとの距離が大きく離れてしまいます。例えばライオンは、水平方向で8メートル以上の堀を掘らなければ施設から出てくる可能性があります。そのため、お客さんからは相当に離れた所にライオンがいる施設が、当時の主流でした。そのような時代に、旭山動物園が檻を基本とした「もうじゅう館」を造りましたので、動物園の業界では総スカンと言いますか、強烈な批判を浴びた施設でした。でも、今ではヒョウを真下から見上げる視点を取り入れない動物園はなく、必ず檻も使用しています。

「もうじゅう館」はヒョウをどの様に見せるかというよりも、実際に飼育している私達がヒョウとの関わりの中で気が付いた事を活かし、一番ヒョウらしくいられる環境を考えに考えて実現した施設です。

ネコ科は良く寝る動物ですが、お客さんは動物園に入園料を払っているからと言う事なのか、寝ているヒョウを見てほとんどの人は「つまらない」と感じていたようです。

そして、どうするかと言いますと、手をたたいて「ほら起きろ」とか、石を拾って投げつけたり、傘でフツと突ついたりとかヒドイ事をします。皆さんは、そんな事をしたことはありませんか。今、笑った方はきっと経験があるのでしょうか。私達が夕方に、動物達を寢室に収容した後、放飼場の中は石ころだらけで、それが悔しくて、悲しくて、毎日そんな思いを抱きながら仕事をしておりました。

それが、リニューアルした施設に引っ越しをして、ヒョウは相変わらず頭上で寝ているだけなのですが、お客さんの見方が全く変わりました。つまらないと言う感想ではなくて、驚きを持ってヒョウを見て頂く事が出来るようになりました。私達が動物達を預かっていて、初めて飼育している“いのち”に恩返しが出来たような気が致しました。

旭山動物園は、「行動展示⁽⁸⁾」と言われますが、私は「営みの展示」、「暮らしの展示」なのだろうと思っています。動物達の“いのち”とか暮らしを、私達人間がふと感じる瞬間こそが最も大切なのではと考えています。

次は、平成12年に「ペンギン館⁽⁹⁾」を造りました。この「ペンギン館」の完成が、お客さん達が大人同士でも来園するようになった原点です。人の価値観、ものの見方は固定化しがちで、人間に対する評価もそうですが、動物に関しては良い所だけを“つまみ食い評価”し、そのイメージを固定化してしまう。ペンギンと言えばヨチヨチ歩きをするぬいぐるみの姿がインプットされてしまう。その可愛らしさだけに関心を持ち、可愛さだけを追求するので、ペンギン達が、どの様に暮らしているのかには全く興味が行かなくなります。動物達を見ての「かわいい」「可哀想」という感情は、

日本人にはとても居心地良く響く言葉で、私達はそれを聞いて「動物を愛している」と思いがちです。しかし、動物達はみな、他のいのちを奪い食べる事で生きています。「かわいい」「可哀想」と言う感情だけでは、動物そのものの姿や、いのちの繋がりの本質は見えてこないと思います。

「ペンギン館」が出来てテレビ等で話題になり、動物園は何十年ぶりだというお爺ちゃんやお婆ちゃんが数多く来園されました。そして、陸上のヨチヨチ歩きのパenguinを見ずに「ペンギン館」の水中トンネルに入ってくると、いつも愉快的な光景が繰り広げられます。水の中を飛ぶように泳ぎ回るパenguinを見ても、お爺ちゃんやお婆ちゃんには、今までインプットされたパenguinの姿とは全くリンクしないのです。それで、そのお爺ちゃんは「どこにパenguinがいる？目の前を泳いでいるこれは何だろう」と聞くと、お婆ちゃんは「これは、きっとマグロの一種よ」と（笑）。この愉快的なやり取りを聞いていて、私達は納得致しました。旭山動物園ではショーをさせている訳では有りません。パenguinは空を飛ぶのと同じ原理で水中を泳いでいます。ですから、動物達のありのままの姿を見て、これは飼育員にはあたり前の姿ですが、たくさんの人が来るようになったのは、お客さんが自分のイメージとは違う何かを見付けられた事、本質的な気付きがあった事が最大の理由と考えています。

「あざらし館」が出来て、良くも悪くも全国区となりました。この円柱水槽もアザラシが一生、アザラシらしく暮らせる環境を造ろうという発想から生まれました。垂直に動く彼らの能力を十分に発揮出来る空間を実現しようと造りましたが、これが、私達の想像を遥かに超える話題となりました。

ゴマフアザラシは、もともと北海道を代表する哺乳類ですので、「あざらし館」は舶来の動物ではない地元の動物を主役にした日本で初めての施設と言って良いと思います。「あざらし館」が話題となり、多くのお客さんが来園して下さると、他の水族館の方々もたくさん視察にきました。明治15年に上野動物園が出来て日本の動物園の歴史は始まりましたが、それから130



〈提供：旭川市旭山動物園〉

年ほど経ちます。この歴史の中で、動物達にショーや芸をさせて拍手、歓声起きる事はありませんでしたが、動物達が何もしない当たり前姿を見せるだけでこれほど多くのお客さんが歓声をあげるのは、たぶん日本の動物園、水族館の歴史の中では初めての出来事でしょう。しかもそれが“ただのアザラシ”に対して起きた事が、私達にも大きな驚きでした。

動物園、水族館からだけではなく、美術館や博物館の関係者の方もたくさん視察にきました。視察理由は、こういう事でした。美術館、博物館は地方にも数多く建設されましたが、どこも経営が大変で、特に集客に苦労されているとの事。ゴッホ展とか大恐竜展のような大きな企画ものを実現出来なければ、その年の入館者数が極端に落ちてしまうのが現実だそうです。しかし、地方の美術館、博物館の関係者の方々は、本来地元の文化や、地元の美術、地元の素晴らしさを伝えたいと考えているはずで、

現状では、それだけを展示してもお客さんは来てくれません。その中で、旭山動物園が“ただのアザラシ”でこれほど多くのお客さんを集めた理由を確認するために、視察に来たと言う事でした。

私の中にも様々な視点が有ります。例えば、ただ動物を飼育する、フィールドで観察をすると言う事と、手元に置いてそのいのちを預かり維持するのは全く別の事です。アザラシが垂直に泳ぐ事は、どの研究論文を見ても出てきません。しかし、明らかにアザラシ達は特徴的な行動としてこの動きをします。この動物達の根源的なものを、どの様に見付けていくのかは、その動物のいのちを日常的に見つめていなければ分からない事で、動物園でいのちを預かる最も大切な事だろうと思います。

中国でも、この円柱を組み込んだアザラシの水槽がたくさん設置されましたが、水槽の真似だけをしても想いを一緒に持って行かないので、後から建設したのにも関わらず旭山動物園を超えられていないと思います。そういう事例が、とても多いと感じています。

それから、これも大きな話題となり、旭山動物園の冬の定番として定着したペンギンの散歩があります。およそ500mのコースをペンギンは集団で歩いて行って、集団で帰ってきますが、この歩く事も素晴らしい能力の1つです。十分に積雪のある時期だけ行っていますが、これはパレードではありません。何故かと言いますと、一切の調教をしていないからです。イヌの散歩と一緒に、わざわざ訓練はしないですね。動画で紹介しますが、屋外放飼場の柵の中からびよんびよんと飛び出て来るのですが、20cm程度の段差を超えるのが精一杯です。この様に、柵に頭をぶついたり、群れの中にはジャンプ力がないもの、皆から遅れるどんくさい（笑）ペン

ギンも動物園の中では生存出来るのです。野生の世界では、真っ先に食べられてしまういのちでしょうね。

今、生物学的には種の多様性とか、環境の多様性、遺伝子の多様性と言われていますが、私は遺伝子の多様性とは基本的には個性の多様性の事だと考えていて、様々な個性があるから色々な可能性を秘めている。遺伝子の多様性とはそういう事なのだろうと思います。同じものを見ていても、みんなが違う反応をする。ペンギンもクローンではありませんので、1羽、1羽が微妙に違うのです。そういう多様性を維持する事が、本当の意味で未来の可能性を創っていくと思います。一律で同じ判断しか出来ないものを育てる事は、生き物としてはどんどん弱くなります。様々な困難に直面した時には、全く異なる反応の出来る個体がたくさん存在する事が、その種としての生きる力になって来るように思います。

実は、このペンギンの散歩の“秘密”は、一方にお客さんに並んで頂き、反対側にもお客さんに並んで頂く。そうすると、ペンギンは真ん中の道しかないのも真っ直ぐに歩いて行きます。散歩コースと分かっているのではなく、両側に人間の壁があるからそこを歩くだけの事。そもそもペンギンは、人間に可愛いと思われたくてヨチヨチ歩きをしている訳ではなく、人間がたまたまそこに可愛らしさを見つけただけの事です。ペンギンは卵を産んでヒナを育てるのは陸上のみでしか出来ないし、その能力の大半を水中生活に使ってしまった結果がこのヨチヨチ歩きです。ですから、現在のペンギンの姿は、陸上に捕食者がいない環境で長く暮らして来た結果、言わばこれはペンギンの進化してきた姿です。人間でも捕まえられるのですから、陸上にはよほど天敵のいない環境であった事が証明され

と思います。ただし、ペンギンは陸上の生き物に対して警戒心がないだけであり、決して人間に慣れているわけではありません。私達飼育係が、ペンギンの放飼場等に入って作業をしたり、餌をあげる事が出来るのは、万が一ペンギンが本気になってかかって来ても、私達が殺される心配が無いから一緒にいられるのです。実際には、飼育担当者は大変です。フリッパー（翼）で叩かれると青あざが出来ます。手はあざだらけ、口ばしでかじられると血まみれになりますし、結構傷だらけです。

さて、今、温暖化とか気候変動と盛んに言われています。東日本大震災もそうですが、知識としてではなくて、どの様にすれば他人事ではなく自分の事として感じる事が出来るかがとても大切な事だと思います。おそらく、知識とか情報のみではどこまでも他人事で、日本人は行動には移らないように思います。最近では、殺人事件さえも毎日、新聞に掲載されているので、つい流し読みをしてしまうほどに心にとどまりません。私達が「エッ！」と驚かなくなっています。この日本社会の中で多くの方が“いのち”は大切だとか、“いのち”をつなぐとか発言しますが、それをどう自分の事として感じて頂く事が出来るのか、そこが大きな課題でありとても重要な所と思います。

私達が出来る事は、本当に小さいのかも知れませんが、でも、例えばペンギンを例にしますと、私達の世代のように蝶ネクタイをさせられたペンギンに価値を見つけるのではなくて、旭山動物園でペンギンを初めて見た子供たちは、おそらく水中で美しく泳ぐ姿、寒さの中で歩く姿をペンギンの本質と感じ、その中に可愛らしさも見付けてくれると思います。この原体験がベースに有れば、「海が汚れてしまう」、「雪がなくなってしまう」等

の現象と向き合う時に、他人事ではなく自分の事として、自分は何が出来るのかと行動に移すと思います。社会を作る時の基本的な価値観を、子供の時に身に付けると、様々な生き物にも配慮が出来る人間が育ってゆくと
思います。そうすれば、道路を造る計画が持ち上がった時に、私達の世代のやり方は真っ直な道路を造るためには木を切るという事を全くためらわ
なかったのですが、生き物に配慮の出来る人間は一度立ち止り、木を切ら
ずに道路を造る方法を考え、決して今の様な環境にはしないはずだと思います。そう言う方々に、たくさん育てて欲しいという想いで旭山動物園は
今日もお客さんをお迎えしています。

冬の旭山動物園にたくさんのお客さんが来園されるようになりましたので、他の動物園や水族館でも冬限定でペンギンを外に出す事を始めたのですが、なぜか音楽が鳴り、着ぐるみを着た人間が先導していたり、手拍子
をしていたり、蝶ネクタイをさせたペンギンを歩かせている所まで現れました。これらは一体何かと言いますと、結局ペンギンのためではなく、自
分達の動物園や水族館が成立するための道具としてペンギンを利用している
のであり、これではどこまでいっても以前と何も変わらないのです。私
達の想いを分かるような形で具現化し見せていくのは、本当に難しい事だ
としみじみ思います。

ここまで、私達の原点のお話を致しました。“いのち”として、私達
は人だけで生きる生き方を選んだ生き物です。でも、種で見た時に、もし
も私が日本人の飼育担当者でしたら客観的に見て、たぶん生物を研究され
ている方にはご理解頂けるとと思いますが、日本の少子高齢化がこれほどま
でに進みますと、これは絶滅に向かっている民族としか思えません。

何故、この様に少子高齢化が進んでしまったのでしょうか。動物は目的がシンプルで、次の代に“いのち”を引き継ぐために生まれてきていて、そこに全てのエネルギーを集中します。次の代を育むために、様々な社会を作っているのです。自分達の世代のための社会ではありません。動物達は、次の世代をどの様に育めるのか、それを実現するために社会を創りあげている、ここが地球に生きる生き物として実に素晴らしく崇高な所だと思います。

“いのち”をつなぐ～ウータン物語～

次はオランウータンの話をご紹介します。オランウータンはチンパンジー、ゴリラ、ヒトと同じヒト科の動物なので、研究者の方でも1人、2人と数える方が多くいます。おそらく人間はチンパンジー型だと思いますが、今日はオランウータンの話を致します。

オランウータンは様々な社会形態を持っています。彼らはジャングルの中ではかなりの距離を取り、お互いの縄張りを守り生活していて、密集した群れは作らず単独で生活をします。子育ては基本



〈提供：旭川市旭山動物園〉

的にはお母さんが1頭で行うため、親子の関わりがとても良く分かります。

旭山動物園では、「おらんうーたん舎」を造るにあたって、オランウータンのブラキエーション⁽¹⁰⁾という特徴的な能力を発揮できる環境をつくる事を強く意識しました。当初は、ずいぶん迷ったのですが、オランウータンの行動を観察する中で、彼らは大人になると手足4本を全て離して飛び移る事は絶対にしないと確信した上でこの施設を造りました。本来の身体能力をいつでも発揮出来る、それが精神的な活動やその動物らしく活動できる原点だという事を、私達は理解していました。

次に、繁殖についてお話を致します。

飼育係は、必ず繁殖を目指します。それは、どの種でもそうですが、動物達は次の代を育むという事を目標にして生きています。逆に言うと、生活する環境が次の代を育む場所でなければ繁殖しませんし、ペアも作りません。例えそこに雄と雌を同居させても、ペアにならずに死んでいくという生き方を選択します。これは、いのちの必然的な選択と考えても良いと思いますし、生き物にとって環境がなくなると種が絶滅に向かうというのはまさにこの事だと思います。私達がつくった環境を、動物達が次の代を育む場所として、狭いなりにも自分達が暮らす場所だと認めてくれた結果が繁殖なのです。ですから私達飼育係は、動物達の繁殖を目指します。

オランウータンの話ですが、ある程度の年齢（大人）になるとペアリングとか、相手を見付ける事は非常に難しくなります。今、母親になっているリアンは当時10歳でした。10歳というと、人間で言いますと子育てができる20歳ぐらいの年齢でしょうか。ジャングルの中ではないので、私達がペアになる相手を見付けなければなりません。オランウータンは雌と

雄とで体格差（飼育下では雄が100数十kg、雌は40～50kg）が非常に大きく、雄の握力は300～400kgもあると言われていたほどで、壁から出ているボルト1本に指1本でぶら下がる事が出来ます。指1本で100数十kgの身体を軽々と支える力がありますから、肉体的には雄が圧倒的に強い種です。それで、大人同士を一緒にする事は非常に危険で



〈提供：旭川市旭山動物園〉

あり、ペアリングはほとんど成功しない動物と言われていました。雌も気に入れば良いのですが、雄が一方向的に自分の思いを通そうとして、その強い握力で雌をつかんだだけで死に至る事も起きてしまいます。

そこで雄と雌の性差が大きい霊長類の場合、飼育下で一般的に行われていた方法は、非常に不自然な話ですが、“いいなずけ”のように小さいうちに一緒にさせるという方法です。本来、オランウータンは7～8歳で親から離れますが、2～3歳の子供でまだ性差がないうちに一緒に飼育を始め、ペアになるのを待ちます。しかし、同居はさせても結局はペアにならず、繁殖に結び付かない事も多いのです。

それで、リアンの時には、同年齢くらいの雄を探したのですが見つかりませんでした。リアンよりも幼い雄と一緒にすれば安心ですが、その雄が大人になった時分にはリアンがお婆ちゃんになってしまいます。それではダメですので、方々探してついに、今、ペアになっているジャックを見付

けました。ジャックは東京の多摩動物園で生まれ、いいなずけのような雌と一緒に育ち大人になりましたが、ジャックはとでも乱暴でしたし、雌と交尾をする事が出来ませんでした。更に、その雌は病気で死んでしまいました。ジャックは既に大人で、しかも交尾が出来ない状況では、動物園の飼育下の常識として、新しい雌をペアリングすると言うのはあり得ない事でした。ジャックはその後、様々な所を転々として、最後に広島(11)の安佐動物園で飼育されていました。ジャックしかいなかった訳ではありませんが、私達は十分に成功する自信があり、ジャックを選びました。当時、ジャックは20歳、人間で言うともう中年のおじさんになりかけている年齢で、年齢的にも常識外の組み合わせで非常に危険を伴うものでした。

オランウータンは、人間よりも優れた所はたくさんあると思いますが、性格的には非常に“ねちっこく”て、一度何かを思い続けると何年でもその事を思い続けられます。執念深さといいますが、集中力といいますが、これは驚くべきものがあります。また、オランウータンは非常によく考えてから行動します。自らの行動の結果を自分自身で納得しない限り、絶対に行動しない動物でもあります。

私達がリアンとジャックのペアリングが成功すると考えた理由は、旭山動物園の環境でした。当時、立体的な施設は当園にしかありませんでした。リアンは野生とまでは言えないのですが、本来持っているリアン自身の能力を発揮できる空中放飼場のある環境の中で飼われていました。一方、ジャックは20年間2次元の平面的生活をして来たので、ほとんど自分の能力は使っていない。本来持っている能力を発揮できずに、フタをされた様な状況にありました。ですから、リアンに精神的な余裕がある。リアン

の方が優位な環境の中であれば、ペアリングに成功するのではと考えて一緒にしたのです。

動物園では新しい動物が引っ越してくると、何日間か室内で網越しにお見合いをします。オランウータンは、フランジ（オスの顔の両脇にあるでっぱり部分）が大きい方が



良い男ですが、ジャックはこれが大きく結構良い男でした（笑）。この動画をご覧ください。リアンは、突然、大きな化け物のようなジャックが現れたので逃げました。ジャックは、

（提供：旭川市旭山動物園）

雌が目の前にいるので追いかける。これが封鎖された檻ですとリアンを簡単に追い詰められたのですが、旭山動物園の立体的な施設の中ではリアンは高く登って逃げています。

そこで、ジャックがどうしたのかと言いますと、いじけたのです（笑）。とても単純な分かりやすい動物です。ところが、ジャックがいじけるとリアンは気になるのか、最も優位な安全な場所から、「この雄、一体どうしたの」とでも言うかのように、ロープ等でジャックにちょっかいを出しました。この間、ジャックはずっとリアンを見ていました。本当にジッと見詰めていました。これは科学的ではないのかも知れませんが、肉体的には圧倒的に強い雄です。本来でしたら力をもって自分の思い通りにしようとするのですが、それが出来ない状況の中で「どうすれば自分を振り向

いてくれるのだらう」と言う考え方に変わった瞬間だと思っています。つまり、ジャックがリアンの気持ちを考えて優しくなれたと私は考えています。

この事は、飼育マニュアルを読んでも、生体を観察したデータを読んでも絶対に出てこない話です。しかし、オランウータンはこういう考え方、思考回路を持っているので、この様な行動を取ると言う事を飼育する現場で、私達自身が驚きの中で学びました。

ジャックがイライラすると、リアンが驚いて離れてしまうので、ジャックはなりふり構わずに大きな体を小さく小さくします。そうするとリアンは気になるのか、「なにか寂しそう」と近付いて行きます。この動画は、最終局面の様子ですが、ジャックは檻の隅っこで背を向けて、まるで人間が「どうせ俺なんか」とすねるように、体を小さく小さくしています。リアンは吸い寄せられるようにジャックの側に来て、そっと触ります。ここからが感動的でした。ジャックは小さくなり、目線を下げます。雌よりも目線を下げて、相手を安心させる事を優先します。ここから、お互いに自らの意思で肌が触れあい、いわゆる飼育係的に言うペアリングは大成功でした。チュッ、チュッとして、私達も見ていて鳥肌が立つぐらい驚きました。きっと、ジャックにとっても魅力があったのでしょうね。しばらく経ち、リアンがふと我に返って、「私、どうしたのかしら」という表情を見せたのですが、実に微笑ましくも有り飼育員一同で感動致しました。ちなみにこの映像（ジャックの背中姿のシーン）をご覧ください。この会場には男性の方もたくさんいらっしゃいますが、男は背中中で何かを語れないとダメですね（笑）。ただ、このジャックの行動についての私達の考察は、動物園界では全く否定されるでしょう。オランウータンや霊長類について

書かれた書籍・論文を幾ら読んでも掲載はされていません。「環境」が、この様に様々な行動を引き出してくると言うのは、本当に驚きです。

旭山動物園では、動物達を新しい環境に引っ越しする度に、動物達が見せてくれる不思議な行動にたくさんの発見をしています。つくづく、私達の置かれているパッケージ、私達が暮らす環境をもう一度見直さなければならぬのではと思います。

今の日本社会では、個体同士の関係がうまく作れなくなっています。例えば安全、安心が強調される一方で、地面に手を突かずに転んでしまう子供が現われて来ている。この社会は、果たして本当に「子供らしく」という視点で組み立てられた環境なのでしょうか。私は、多くの事に疑問を感じています。大人が管理しやすい環境と、子供が子供らしくできる環境は全く違うものです。もう少し、人間社会も“生き物”としての原点に立ち返って、様々な事を組み直さなければならない所に来ているように思います。

ちなみに、このオランウータンの事例のように、大人同士をペアリングする時に、動物園で行うもう一つの方法があります。向精神薬、いわゆるトランキライザー⁽¹²⁾と言われる精神薬を使う方法で、現在でも実施している動物園があります。薬を飲ませて少しフラフラにしておき、ペアリングさせる方法です。少しずつ薬を少なくして行って、一緒にいられる状況を作り出す方法もあるのです。しかし、これもまた小さい時のいいなずけと同じで、元々不自然な事であり、結果としてペアにはならないし繁殖に結びつかない事が多いようです。

今、人間社会の中では精神科よりも、むしろ小児科とか、精神科以外で

向精神薬を処方する事が大きな問題となっています。人間の生理機能を直ぐに薬で制御する前に、視覚、聴覚など五感で感じるものを大切に人間の生き方を考え直してみる事が大事ではないかと思ひます。また、その事を研究する分野があつても良いのではないかと私は思ひます。ヒトとはどんな生き物であるのかと言う事を、私達自身が一番忘れてしまつてゐるような気がします。旭山動物園は環境を変えて新しい施設にしてからは、ホッキョクグマやライオン、オオカミなどでもトランクライザーを一切使わずにペアリングを実現しています。その中での事故は、基本的にはありません。結果から考えると、住む環境がペアリングを行う上でとても大きな要素だと思ひます。

こうして、自分達の意味でペアになる道を選んだリアンとジャックは、2カ月後に交尾が成立しました。この事は、動物園界では常識的ではなく、私達にも大きな驚きでした。ジャックは20歳、人間で言うと中年のおじさんです。ここまで交尾の経験のなかつたジャックですから、飼育員も交尾は無理だと判断してゐました。ジャックが自分の意思で交尾に成功した事を考えますと、出会いとか、色々なものに自分の意思や感情が働く事で初めて繁殖行動に繋がるという事実は、どの生き物にも基本的には共通すると思ひます。なぜ、私達が少子化して行くのか、考え直すべき事がたくさん有るような気がします。

次に出産についてですが、これがまたとても難しいのですが、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの生理機能はほとんどヒトと一緒にです。28日ごとに排卵があつて、その間に生理が有ります。ヒトと決定的に違う所は、出産すると排卵が4～5年止まる事です。それは、母親が子供から

目を離せるようになるまで、つまり子供がほぼ一人立ち出来るまで約4～5年は掛かると言う証明でもあります。ですから、通常は、弟妹は5～6年置きにしか産まれません。「どの種が今、絶滅危惧種ですか」と聞かれるのですが、その判断には繁殖率の低さが非常に大きな要素で、ある一定以上、繁殖率が減ってしまうと回復は不可能とされるくらいに決定的なものです。

人間が、子育てに一番エネルギーを使っている生き物と考えるのは、大間違いかも知れません。オランウータンは365日×24時間×数年間、我が子を見守り続けます。その愛情は見返りがある訳ではなく、ただひたすらに愛情を注ぎ続けます。実は、これはどの生き物達も同じです。しかし、ある時期を過ぎると、「あとは一人で生きなさい！」とでも言うように、明確な線を引くのです。動物達は、本当にすごいと思います。

オランウータンは7～8歳で独り立ちしますので、それまで1度は弟、妹の出産を体験します。つまり、出産や子育ての学習の機会は母親と過ごしている間の、通常1度しかありません。ところが、リアンは台湾の動物園で親に育てられ、5歳の時に旭山動物園に来ましたので弟、妹の出産には立ち会っていません。私達は、10歳で初産を迎えたリアンが、出産をしても果たして育児が出来るのかを大変危惧していました。そこで、育児が出来ない状況も想定して、モニターを設置し別室からカメラで観察していました。子供が産まれました。「ピー、ピー、ピー、ピー」と元気に鳴いています。でも、リアンは赤ちゃんに触る事が出来ません。「何か、私の体から出てきたけど」と言う感じで、オロオロするばかりです。結局、最後はダメでした。檻の中にあった袋にすっぽりと入ってしまったのです

が、これは全くお手上げと言う意思表示でした。そして、リアンは動こうともしなくなりました。30分ほど観察を続けていましたが、袋から出てくる気配はなく、飼育員としての判断が求められる状況となりました。この様なケースでは、選択肢は2つ有ります。一つは、僅かの可能性にかけてこのまま放置して置く方法ですが、ほぼ100%の確率で赤ちゃんは死にます。もう一つは、ヒトが育てる人工保育の選択です。

お涙頂戴的な動物番組では、人工保育を頻繁に取り上げていますが、これは飼育の失敗の証明でもあります。オランウータンはとてもヒトに近いので、人工保育自体はヒトの赤ちゃんと考えて育てると決して難しくは有りません。しかし、生まれたオランウータンは、育ての親とコミュニケーションを取ろうとするので、当然ですがヒトになろうとしてしまう。オランウータンが成長すると、私達は一緒に居る事は出来ません。その時に、オランウータンに戻そうとしても今度はオランウータンとコミュニケーションが取れないのです。オランウータンとして生まれながら、本当に孤独な50年、60年の一生となってしまいます。ですから、当園では最初から人工保育は選択肢に入れない方針で飼育をして来ました。それでは、オランウータンの赤ちゃんを見殺しにしてしまうのか、と言うとそうでは有りません。私達は同じ哺乳類です。哺乳類は基本的には母乳を飲めば育つ生き物です。

赤ちゃんがお母さんの母乳を飲める状態、つまり、私達が介添えをして赤ちゃんをお母さんの乳首に吸い付ける事が出来ればいのちはつなぐ事が出来ます。しかし、この人間によるサポートは、飼育係が母親との間に十分な信頼関係を築いていなければ出来ません。閉じこもっていたリアンを

袋から出して、赤ちゃんをタオルで温め握力をつけて乳首を吸わせました。これも、非科学的な言い方であるのかも知れませんが、赤ちゃんに乳首を吸わせる事が母と子の第一歩、要するに母親（母性）のスイッチが入る原点だと思います。

最初は戸惑っていたリアンですが、やがて赤ちゃんを抱きかかえて地面に置かなくなりました。何とかして赤ちゃんを持っていようとして、頭の上や足の上にはですが、抱っこするようになりました。そして、翌日には、リアンの顔は“母親の顔”になっていました。それは、本当に劇的な変化でした。

動物園界では、人工保育は技術的には「確立」している部分があり、親が子供を育てないと分かった時点で、直ちに人工保育を選択する事が多いのが現状です。当園ではリアンの成功例があったので、これを介添え保育⁽¹³⁾と呼んでいます。チンパンジーでもこの方法にトライしてみました。過去10年間に亘り毎年出産しても、赤ちゃんを“物”としか扱えなかったチンパンジーが、介添え保育を3～4日したところ、立派なお母さんになる事が出来ました。やはり哺乳類としての原点は、母乳を吸って生きる事だと教えられた思いです。イヌもネコも抱っこはしません。抱っこをして母乳を与える生き物はヒトとサルだけです。サルを見ていると、抱っこをしてお尻に手を添える絶妙な距離感が、抱っこの基本だと分かります。ヒトも同じ霊長類ですから、抱っこが育児の基本となるはず。赤ちゃんはお母さんの温かい胸の中で、お母さんと同じ視線で物を見て、心臓の鼓動を感じ、様々なものを五感で感じながら成長していきます。私達がふるさとや幼き日を語る時に、“おふくろの味”と言う言葉を使う事

が有ると思います。実は、サルにもお母さんから引き継がれるおふくろの味が有るようです。

サルも離乳をする時が来ます。オランウータンですと、生後半ぐらいで母乳が足りなくなりますが、お母さんが噛み砕いて赤ちゃんに分けて与える事はしません。お母さんは常に自分が食べたい時に、食べたい分を食べてしまいます。赤ちゃんは胸元にいますので、母乳だけで物足りない時には、強引にお母さんの口の中に手を入れます。そうして、お母さんの食べかすが付いた指をなめる。実は、それが離乳食の始まりで、おふくろの味の誕生です。甘いとか苦いとかと言う科学的な意味での味覚ではなくて、美味しいと感じる味覚が育ってゆきます。その味覚、お母さんが食べているものを美味しいと感じる味覚が、とても大事です。自然界では、7～8歳になると独り立ちしジャングルで生活します。野生のオランウータンにとっては、何千種類もの木の実の中で、どれが毒でどれが食べて良いものなのかは自分の味覚だけが頼りです。その味覚は、お母さんから受け継いだ“お母さんが食べているものは美味しい”と感じる感覚が原点にあるのです。

美味しいものは食べる、美味しいと思わないものは食べない。そのこと自体がその土地で暮らす根源的な事だと思います。ふるさと味の味とか、おふくろの味と言うのはとても大事で、それが地産地消や地元・ふるさとを愛する事に繋がります。先ほどの、とわの森三愛高校生の発表でも紹介されていた酪農学園の健土健民⁽¹⁴⁾の精神にもありますが、土を愛し、土地を愛しというのが人間としての原点ではないかと思います。哺乳類としての“いのち”のつなぎ方、特に霊長類としてはその原点を引き継ぐ事が、

本来の社会機能の基盤になければならないと思います。

“おふくろの味”が、いのちを守るのです。

男性と女性が一緒に働く事が出来るようになること、それは素晴らしい事ですが、一方でそれは様々な家事が省略されていく事も意味するようになっています。東京で暮らす子供たちを対象にした実験がテレビで放送されていました。お母さん達が、旧来から作ってくれていた煮物などと、誰のために作ったのか分からないカップラーメンを比較して、子供たちに「どちらが美味しいか」と問う実験でした。結果は、驚くほど多くの子供が、カップラーメンが美味しいと答えていました。カップラーメンの方が美味しいと言う事は、私達が本来、哺乳類として引き継いでいくこと、長い歴史、文化の中で引き継いで来た様々なことを全く引き継がずに、子供たちが育って来ていると言う事です。これは、私達が社会基盤、コミュニケーション、個体としての関係、美味しさを感じる味覚、そこで暮らすという地に足のついた感覚、そういう人間としての根源的なものをどこかに置き忘れながら、一方で、便利さ、快適さ、安全のみを求め続けて来た結果なのかも知れません。

味覚はとても大事な感覚です。親が食べないものを、子供が平気で食べるようなことは、生き物として本来はあり得ない話です。おふくろの味の崩壊は、味覚で安心・安全を確認出来なくなることに繋がります。それが、引き継がれていかないのは“種”としては存続出来ない事でもあり、極めて憂慮すべきことです。この写真の様に、抱っこをしながら、お母さんの胸の中で育てていくのが、生き方の基本ではないかと思います。

さて、リアンの第2子（モリト：雄）の出産の時ですが、私達が介添

えをした事も有り、しっかりと抱くことが出来ました。この時、第1子モモ（雌）は、リアンが破水して赤ちゃんを産み出した瞬間から、間近で観察をしていました。モモは、1人立ちする前のただ一度の機会であるお母さんの出産そして子育てを見て学び、自分が母親になっていきます。

動物達の世界では、誕生と死は日常の中にある出来事です。決して特別な事ではなくて、日常です。動物達は、その誕生と死を乗り越えて生きていく力強さがある。人間社会では“いのちは大切”と言うフレーズが切り札的な地位にあります。誕生すること、死ぬことを特別な事として、“いのちは大切”と言う切り札の中に押し込め、組み立てようとしているように思います。私は、日常の中に死と誕生を感じる事、考える事が、現在、とても大切なことであると考えています。

動物達は、他との比較ではなく、等身大の我が子を見続ける事が出来ます。リアンが、誰に教わることなく母親になれるのは、比較ではなく自分の子供のことを見続ける事が出来るからだと考えます。例えば、自分の子供が障がいを持っていても、他の子供と比較してどうして自分の子供は出来ないのか、と言う物の見方はしない。その子供が、今出来る事、次に出来る事、そのことを見極めながら子育てをしているので、立派な母親になっていけると思います。リアンは、姉のモモに弟の子守りをさせて“子育て”を学ばせていました。母親のリアンに比べると確かに危なっかしい子守りなのですが、生き物がいのちを引き継いで行くとはこういう事です。動物達は、本当に素晴らしいです。

これは、綱を渡る練習をしている時の映像です。子供が自分から練習に行くのでは有りません。リアンと一緒に登って行き、子供の手を離して

ロープにぶら下げます。子供は、はじめは「キィー、キィー」と駄々をこねますが、リアンは根気よく、根気よく教えます。この映像をご覧ください。子供が、万が一ロープから手を離してしまっても助けられるようにリアンは常に子供の下の位置にいて、片時も目を離すこと無く練習を続けます。どうしてここまで考える事が出来るのかと思うくらい、見事なまでに母親としての愛情を注ぎます。

少し教育的な話になってしまうかも知れませんが、育児を途中で放棄する事が動物園内でも起きる事があります。この育児放棄は、皮肉な話なのですが、動物達に「安全」を保証した時に起きやすいのです。チンパンジーの事例でお話ししましょう。チンパンジーは、社会性があるので群れをつくりませんが、群れの中では雌にも明確な順位があり、順位の低い雌は何かおどおどしながら子育てをしています。飼育係は、チンパンジー4頭全体でのカロリー計算をしてエサを与えていますが、強い雌が美味しいものを独り占めしてしまう事が有ります。こういう状態が続く時には、最も順位の低い雌の親子だけを隔離し飼育します。本来、子守り中の母親は群れの中では、抱きかかえた子供を手離す事は絶対に無いのですが、心配事が全て消えてエサを横取りされる事もない安全な環境にいと、子供を地面に置いて自分のエサを食べ始め、自分の事をし始めます。その様な毎日が続くと、やがて子供に注意を払わなくなります。子供が手の届かない距離まで這って行っても、それでも母親が自分の事をしている。この様に、ある日突然、子供との関係が切れてしまうことがあるのです。

この映像に有る様に、オランウータンの施設は、子供にはとても危険な施設です。怪力を持ったジャックに壊されないように全ての具材は太く、

空中散歩をするロープの間隔も大人用に造っているので、子供には危険です。ですから、母親は自分の子供を見守り続けます。危険な環境があるからこそ自分の子供の能力を見極め、片時も目を離さずに見守り続けていると思います。危険な環境での子育てだからこそ、親子の絆が育まれ、より深くなっていく側面が有ると考えています。

日本の社会では、子供に起きた事を全て誰かのせいにする事が多過ぎるようになっていて感じています。本来、最も身近にいる親が理解していなければならぬ事を、親が分からなくなっている。先ほどのチンパンジーの事例ではないですが、「安全」が保証されるようになると、自分の子供の能力が見えなくなると言う、皮肉な一面が有るような気がします。それで、旭山動物園の施設はどの施設もかなり危険です。施設から転落すれば死んでしまうし、動物同士の争いが起きれば死んでしまう事もある、そういう環境をつくっています。これらの環境は、“動物らしく”、“動物達のありのまま”と言う事を徹底して考えて、たどり着いた結果です。この旭山動物園の取り組みをどう評価し判断するのかは、とても難しいところだと思います。私自身、“いのちが輝く”とは、“生き物が生き活きとする”とは何なのかと、自問自答する毎日です。

“いのち”を伝える～誕生の数だけ死がある～

“いのち”についてですが、今、動物園は環境教育や生命教育の場として様々注目され、数多くとり上げられていますが、生まれた“いのち”は当然死で終わります。その事の理解が足りないように思います。私達、現

場にいる人間の中では、動物達の死をどう迎えさせてあげるかが、実は一番難しくいつも最も悩む事です。自然というのは、基本的には食物連鎖で成り立っています。食物連鎖というのは、食べる、食べられる関係で、要するに殺す、殺される関係が全て輪で繋がりを閉じています。その中で“いのち”が輝く。誰かが助かると言う事は、一方で他の誰かが死ぬという事です。人間だけが違う生き方を選んだ生き物です。この事を、私達人間は理解しなくてはなりません。

エゾリスは、野生では平均寿命は3～4年です。ただし、これはエゾリスが3～4年で老衰の年齢となり死ぬと言う事では有りません。旭山動物園で飼育し最も長生きしたエゾリスは16年間生きました。ですから、エゾリスは生物学的には16年の寿命を持っているけれども、自然界では3～4年で次の“いのち”に引き継がれていると言う事なのです。本来、その様にして引き継がれていく仕組みの中で、様々な生命環（生命の循環）を持っている生き物達を、動物園はその輪から切り取り抜き出しているのです、動物園の生き物達をある意味終われない“いのち”にしています。それでも、必ず終わりは来ます。

どう生きるかは、どう死ぬか、どういう最期を迎えるかで決まる。飼育の結果は、その死の迎えさせ方で決まるような気がして、私達飼育員はいつも考えさせられます。

数年前に、上川町のベアーセンター⁽¹⁵⁾から、野生由来のカンゾウというホッキョクグマを引き取り、飼育を始めました。

当時、日本で飼育していた最高齢のホッキョクグマで、推定30歳以上と言う事でした。受け入れる際には麻酔をして客観的なデータを取りまし



〈提供：旭川市旭山動物園〉

たが、30歳を過ぎている事も有りかなりの老衰状態でした。肝機能が相当衰えていて、特に肝臓が悪かったのです。肝臓が悪かったので、カンゾウという名前をつけました(笑)。子供たちに名前の由来を聞かれる度に、とても説明

し辛かった事を思い出します。野生では、とうにアザラシを捕る能力のないお爺ちゃんクマでは有りましたが、しかし、カンゾウはとても威厳のある立派なクマでした。

ある時、いつものようにひと泳ぎをして、プールから出て来た時の事でした。プール一面に白い米粒のようなものが浮いていました。おびただし数のウジでした。慌てて、カンゾウを診てみると、爪の間等にはビッシリとウジが刺さっていて、耳を澄ませるとウジが動き回るプチプチと言う音が聞こえるほどのひどい有り様でした。新陳代謝が衰えて、老廃物の代謝が出来ずに身体の腐敗が進行する状況になっていました。ハエはそういう事に、驚くほど敏感な生き物です。直ぐに、カンゾウに麻酔をかけて徹底的に検査をすると、肝機能も確かに衰えてはいたのですが、腎不全寸前でもありました。

そこで、私達は考えました、食肉目、最近ではネコ目⁽¹⁶⁾と言いますが、食肉目の肉食動物として、ホッキョクグマとして、何よりもカンゾウとして、最期はどうあるべきなのかと言う事です。もちろん、自然に老衰で死

ぬという着地点を見付けられるのが最も幸せだとは思いますが、最期と言う事については、私達は動物らしくと言う意味で生活の質とか、尊厳だとかを考える中で、安楽殺も選択肢に入れていのちを考えています。動物園によっては安楽殺を選択しない所もあり、あくまでもこれは、旭山動物園の考え方です。

最初のオオカミの所でもお話ししましたが、延命処置というのは、私達の自己満足に陥ってしまう可能性が高いと言う事も肝に銘じておかなければなりません。それでも、安楽殺は、いつでも最後まで迷います。また、獣医師としての科学的判断に基づく決定を押しつける事は出来ません。飼われている動物の運命を決めるのには、どんな場合にでも、飼育担当者の意向が最も重要です。

このカンゾウの時には、人工透析、腹膜透析で延命するという判断が出来ない中で、カンゾウらしい最期の時を迎えさせてあげたいとの思いで治療を続けていました。死期が近づいた時には、既にカンゾウは、耳は聞こえず、目も見えなかったのですが、人の来た気配は感じるのか扉が開くたびに、とても起立出来る状態ではないのですが、外に出せと言う動作をするのです。

この様に、日常的にいのちに関わっていると、いのちと言うのは、科学では説明出来ない、理屈でもない、生物学でもない、やはり生きていくと言う当たり前の力、そのことが原点にあるのだなと思います。カンゾウは、翌朝見に行くと、死亡していました。ホッキョクグマでは何度も経験がありますが、治療を引っ張り過ぎてしまい、死亡後に解剖すると腎臓が溶けて片方がなくなっている事も有りました。そこまで、ギリギリまで生かさ

せてしまう事が、果たしてホッキョクグマらしい死なののでしょうか。いのちの尊厳とは何なののでしょうか。私は、旭山動物園に就職するまで、獣医師としての治療は長生きをさせる事が、命を大切にす最善の基準だと考えて来ました。しかし、延命治療は人間側の概念であり、動物達は自分に降りかかって来た痛みや苦しみを受け入れる生き方をする事が分かって来ました。何かを恨んだ目で死ぬ動物を、私は見た事がありません。

日常的に、数多くの生と死を見つめながら、安楽殺も選択肢に入れて考えています。

現在、旭山動物園ではゾウを飼育していませんが、以前に、若くして立てなくなったナナというマルミミゾウがいました。ゾウの様に大きな動物は、長時間立てない状態になる事は、限りなく死を意味します。ナナの場合、口にエサを運ぶと食べるし、水をやると飲みますが、原因が分かりませんでした。これがアフリカの草原で起きた事であれば、太陽の日差しか、ライオンが、いずれにせよ何かが終わらせてくれる“いのち”なのかも知れません。ナナ自身の重い体重の為に、褥瘡⁽¹⁷⁾や臓器障害の進行は止められません。獣医師として出来る事は、鎮痛治療で痛みを取ってあげる事のみで、どの様に管理をしても、皮膚がめくれていってしまいました。飼育員の付きっきりの看病の甲斐もなく、1週間後に人気者のナナは静かに息を引き取りました。

どの生き物も必ずいのちを終えます。その死と向き合う、旭山動物園独自の考え方のひとつですが、園内の動物の死を丁寧にお知らせする事にしています。

動物園は楽しい場所でなければならないと言われます。ですから、動物

園では、動物の赤ちゃんが産まれたり、新しい動物がやって来た事などは積極的に紹介しますが、動物の死を伝える事は基本的にはタブーでした。ゾウやクマなどの大きな動物が死亡した時には、確かにマスコミに発表となりますが、「ペンギン館」で飼育している50数羽のペンギンの1羽が死亡しても、誰一人気付く事は無いでしょう。死を伝える事はマイナスイメージであると言うのがタブーとする理由で、飼育員は死亡の事実を分かっているにもかかわらず、敢えて公表はしないと言うのが動物園の常識でした。しかし、当園では「いのち、いのちこそ大切」と言っていて、産まれたいのちは伝え、そのいのちが亡くなった事を伝えないのはおかしいと言う結論に至りました。5～6年前からですが、私達が個体識別をされていて、動物達の産まれてからのヒストリーや最期を把握しているものに関しては、生だけでなく死も、全て伝えようと言う事で始めました。どの様に伝えるかについては、私達の中でも相当の話し合いをした上でこの写真の「喪中」と書かれた紙を檻の前に貼り出す事にしました。しかし、この事については、動物園、水族館の関係者の中では、「あざらし館」を造る時以上の激論となりました。禁止手だ、絶対にダメだと言う声ばかりでした。でも、私は「命が生まれるなら、必ず死ぬ」と言う当たり前の事を理解して頂きたかったのです。そうする事で、初めて“いのちの営み”そのものを伝える事が可



〈提供：旭川市旭山動物園〉

能になると考えています。

旭山動物園では、その年の4月から「産めました」を伝えるように、「死にました」も全部伝え、更に安楽殺を選択した場合にはそれも正直に掲載しました。また、その動物らしく生きようとした過程の中で、動物同士の「闘争」で死ぬ事もあるので、その事も全て正直に伝えています。その度に、相当の苦情とか、様々な批判があります。「わざわざ発表しなければ、知らずに済んだのに」などと言われます。確かに、その通りです。

でも、考えてみて下さい。私達が預かっているのは“いのち”なのです。そもそも動物園は、狭い場所にいのちを閉じ込めた、人間がエゴで造った場所です。その動物園で私達が楽しませて頂いたのであれば、少なくともそのいのちと、その死に対して「ありがとう」と伝えなければいけないのではないかと思います。

「動物園なんか、なくなれば良い」という意見もあります。私は、なくなっても良いと思っています。動物園がなくても、様々な生き物と共に生きる未来が見られるのなら、動物園は要らないのかも知れません。未だに、他の動物園では死を伝える事は行なわれていませんが、旭山動物園では止めるつもりはありません。いのちの死は、伝えなければならぬ大切な事ですから。今は、老いて行く過程が見えにくい社会です。いのちが終わるまで、しっかりと看取れる社会になって欲しいですね。

先ほどもお話ししましたが、旭山の展示方法は「行動展示」と言われていますが、私は「いのちの営みの展示」と考えています。いのちの営みの中に行動があり、成長や老いや死も全て含まれています。動物のいのちは人間よりも短いので、私達は世話をしていた動物が元気な頃から年齢を重

ねて動けなくなり亡くなってしまふ過程や、その後新しいいのちが産まれる所まで見続ける事が出来ます。人間が人間から死を学べなくなってしまう日本では、それを動物から学ぶ事になるのかも知れません。

この、旭山動物園の姿勢を「その通りだ」と理解して下さる方々が全国に増えています。そのせいか、当園が動物相談所のようにもなって来て、飼っているペットの相談で沖縄の方や、驚く程遠くから電話が来る事もあります。地元の動物園ではなく、「旭山動物園に相談したい」と言って下さる方の声は大変有難く、私達へのエールと考えています。

この様な多くの経験から、私が学んだ事は、前例がないからやらない、出来ないと言う事ではなく、自分達が方針を決めたならそれをぶれずにやり抜く事。その事が何か新しいものに繋がり、新しいものを創り出す可能性が有ると言う事です。

私は“いのち”は、死をきちんと受け入れて初めて、心の中で生き始める様な気がします。現代人は、子供の時から虫捕りもしないし、生き物を身近に置かない人が増えていて、死を身近に感じ取る事が難しくなっていると思います。生きているうちは身近にいて当たり前存在ですが、実は心の中で生き始めるのは、亡くなってからです。

例えば、学校でウサギを飼育していて、先生が出勤した時にウサギが死んでいるとします。多くの場合、子供たちが登校前に死骸を全て片づけてしまいます。そして、子供たちに「みんなが一生懸命に世話をしたから、幸せそうな顔して死んでいったよ」と伝えます。子供たちは死と向き合う事もなく「早く次のウサギを飼って」となります。これではウサギの“いのち”が心の中に残り、その悲しみを乗り越えて次にまた飼育をしたいと

言う事には繋がっていないように思います。

科学的ではないのかも知れませんが、心の中に死というもの、大切な存在が消えてしまった体験をたくさん持っている人は、人生においてギリギリの所で踏ん張りが効くように思います。他の死を通じて学んだ人間は、最終的には自分自身の生き方を変えていくような気がします。“いのち”を大切にするとするのは、死を感じる事なのかも知れません。死を感じる対象は、どのようないのちでも良いと思います。カビだらけになって死んでいく虫でも良いのです。虫を捕って来た子供に、「死ぬ前に放してあげなさい」と言う親がいますが、私は1度手にしたものは手放すなよと言いたいです。1度、捕まえたならその“いのち”に対して責任を持ち、死まできちんと見守ると言う事、その経験を持っていないからいけないと思います。特に、将来生き物に関わる研究分野、“いのち”に関わる研究の道に進む人間こそ、生き物の生と死の原体験をたくさん持っていなければ、“いのち”の研究を単なる操作としてしまう様な危惧を、私は感じています。

生物学の最先端で、ニワトリ等の遺伝子を研究している方と共同研究をした事があります。ニワトリの卵の胚で実験を行っていた方ですが、驚く事にニワトリのヒナを知りませんでした。卵を孵卵器に入れて、カメラ⁽¹⁸⁾を作る研究を行っていたのですが、何ヶ月か後に孵ったヒナの様子を見に来て、たまたま居たスズメのヒナを見て「これが孵ったニワトリか」と言ったのです。世界最先端の人です。いのちを、自分の研究の対象としてしか見ていない。その生き物の“いのち”そのものの存在を知らない。そう言う方が、世界的な権威になるのだと思うと、私は日本の生命科

学の未来に、大きな不安を感じました。子供のころからいのちの原体験を、たくさん、たくさん持って育っていく。そうする事が、この地球、社会や人間関係の中で起きる事、人生の中で降り掛かる様々な事を少し広く捉えたり、感性を通じて捉える事の出来る人間が育っていくように思います。

予定の時間が参りました。本当はもう少しお話ししたい事があるのですが、これ以上お話しをしますと相当に時間オーバーとなりますので、私の話はここまでとしたいと思います。この続きは、ぜひ旭山動物園にも足を運んで頂き、皆さまの目でお確かめ下さいとお願い致しまして私の話は終わりに致します。最後まで、ご清聴頂きありがとうございました（拍手）。

質疑応答

座長 麻田 理事長

既に予定した時間となりましたが、ご質問のある方、お一人だけ如何でしょうか。

この機会に、坂東園長にぜひ聞いてみたいということがございましたら挙手をお願い致します。動物園でのお仕事のお話しを通じて、やはり環境というもの、自然というもの、色々な面で人間の“いのち”を考えさせられたのではないかと思います。地球上には沢山の生き物がいて、その食物連鎖の中でそれぞれがみんな一生懸命生きているという事です。坂東園長の今のお話の中で、ある面では人間の“いのち”というものを他の動物と比べて、どう考えたら良いのかと考えさせられました。あるいは人間社会のあり方まで、何か示唆を得た様に思います。皆さん、ご質問ございましたらどうぞお願い致します。

女性

ありがとうございます。全てがおもしろかったです。お話の中で「もし、私が日本人の飼育担当者であったなら、これは絶滅に向かっている民族」と仰ったのですが、もしも、坂東園長が人間の飼育担当者でしたら、人間にとって“いのち”が輝く環境をどのように作りたいとお考えになりますか。

坂東 園長

最近すごく感じるのは、大人が自分で判断出来るキャパシティが無くなって来ているという事です。例えば子供が病気になり、熱を出す。身近な人が転んで怪我をした時などに、「これなら病院に行かなくても大丈夫」と、状況判断が出来る人が本当にいなくなりました。直ぐに病院に行って先生に診てもらいなさい、どこどこに行って診てもらいなさいと、必ず誰かに転嫁していく、ある意味責任転嫁です。その様な環境の中で、原体験として例えば“危険”を自分で感じられる感性、感覚を育てていかなければならないのだらうと思います。力のない子供の時だからこそ、本気で喧嘩をしても擦り傷程度で済みますが、大人になってからいきなり喧嘩をするので手加減も分からずに殺したり、殺されたりしてしまいます。次の世代を育むのだという視点に立って、社会をもう一度原点から組み立て直してみると言う事が、今、必要だと思います。景色の作り方もそうですが、遊園地の遊具が消えて行くのはおかしな話で、それは決して子供の為ではないですね。大人が「危険」を先回りして封印し責任逃れをしたいだけの話です。私達が持っている身体的な能力や感性を使わなくなり、情報だけが飛び交う現代、もう少し五感で感じる仕掛け、例えば丸1日「一切言葉を発せずにコミュニケーションを取ってみましょう」と言うような企画をしてみませんか。きっと原点に返ったおもしろいコミュニケーション方法などを見つけ出して、楽しい発見・気付きがあると思います。人間が持つ、感じるという感覚、五感で感じるものをもっと身近に体験し育ていける環境をどうすれば作っていけるのか、そこに私達が求める答えが有るように思います。

座長 麻田 理事長

ありがとうございました。坂東園長、本当に幅広く、熱心に、色々なお話をして頂きました。坂東園長は酪農学園の卒業生です。酪農学園の建学の精神は三愛精神⁽¹⁹⁾と健土健民ですが、健土健民というのは、黒澤西蔵⁽²⁰⁾先生が作られたものです。健全な国土があって初めて健全な国民が生まれる。不健全な国土からは、不健全な国民しか生まれえないということです。この建学の精神は、実は、足尾銅山鉍毒事件に人生の全てをかけて、自然が守られ人々が平和に暮らせる社会というものを訴え続けてきた田中正造⁽²¹⁾翁から受け継いだものなのです。翁が亡くなって今年で満100年になります。

この田中正造翁が何と言ったかという「国土は国民の母体であって、少しの国土も無駄にしてはならない。国土の尊厳を犯すものは必ず滅びる」と言っているのです。そういうことから、黒澤先生は健土健民ということを行いました。要は自然というものが真に守られていて、初めて色々なことが成り立っていくのだと言うことです。今日、坂東園長はまさしくうちの卒業生だと強く感じまして、非常に私は嬉しいです。このことをこれからの社会の中で本当に理解していくことが出来れば良いのではないかと思います。坂東園長、本当にありがとうございました。また、今日は最後まで熱心に、これだけ多くの皆さんにお聞き頂きまして、心から感謝を申し上げます。生命科学という分野は非常に大事な分野です。秋山財団がこの様な催しを実現して下さいましたことに対しまして、心から敬意と感謝を申し上げたいと思います。(拍手)

司会（宮原常務理事）

坂東様、麻田様、ありがとうございました。これをもちまして、贈呈式の特別講演会を終了致します。多数ご出席を頂きまして、本当にありがとうございました。（拍手）

（終了）

〈注釈〉

いのちをつなぐ 未来のために ～ 伝えるのは いのちの輝き ～

(秋山財団事務局作成)

(1) 恩返しプロジェクト

ボルネオ島では、パーム油の原料となるアブラヤシの農園開発が急速に進み、ゾウの棲み処となる熱帯雨林が伐採され、ボルネオゾウが絶滅の危機に瀕している。パーム油は、日本では食用の他に洗剤や石鹸にも広く使われており、生活に欠かせない物となっている。坂東園長は「パーム油によって恩恵を受けている私達もボルネオ島に恩返しをしよう」と発案し、旭山動物園とボルネオ保全トラスト・ジャパン（坂東園長は同法人理事）は、現地のマレーシア・サバ州野生生物局に協力して、2010年に移動用のゾウの檻を完成、2013年9月にはボルネオゾウの一時的な保護を行うレスキューセンター1期工事を終了し開所式を行った。

(2) きりん舎・かば館

2013年11月21日にオープンした大型草食獣の生態を身近に観察できる新たな行動展示施設。きりん舎の放飼場ではキリンを様々な視線から観察でき、低い観察テラス（ガラス張り）では水を飲む姿を、高い場所からは食事の様子などが間近で見ることができる。また、かば館には広くて深い屋内プールを設置しており、プールの上側からは水面から目・鼻・耳を出して周りを見ている様子や、横からは水中を軽やかな足取りで歩くカバの姿を観察出来る。かば館内を下に降りると、透明な窓を通してカバを下から観察できる場所がある。さらに、水深3mのプール底を歩く姿や、体重の重いカバが軽くジャンプをするように底から上にあがる姿には歓声が上がる。

(3) 受領者からのメッセージ

秋山財団贈呈式にて、助成を受けた研究やプロジェクト活動を広く知って頂くと共に理解者を広げるために企画した参加型プログラム。2013年度からスタートしたが、初年度は4つのメッセージ発表が行われた。この様子は、財団ホームページに動画と写真にて紹介している。

(4) ワンポイントガイド

飼育員がガイド役となり、飼育している動物の日常の姿を、入園者に直接説明する時間で、1986年から毎週日曜日と祝日に始めた。飼育担当者だからこそ知る動物達の特徴ある行動や日常生活の話題についてより深く解説するため、来園者の人気となっている。

(5) もぐもぐタイム

飼育員が動物達へ給餌をする時間。給餌の際に、動物達が本来持っている能力をひき出すようにエサを与えるのが、もぐもぐタイムの特徴。プールに投げ入れた魚を追ってホッキョクグマがプールへ豪快にダイビングする姿や、オランウータンが高さ17mの空中放飼場で果物を食べる姿、ペンギンが水中を素早く泳ぐ姿などを楽しむことが出来る。飼育員が動物達の特徴ある動きや自然界で動物がおかれている現状も解説する。

(6) もうじゅう館

1998年9月にオープン。動物と同じ高さでの観察や、上から、真下からと様々な角度で動物を観察できる施設。アムールトラ、ライオン、ユキヒョウ、アムールヒョウ、クロヒョウ、ヒグマが飼育されている。間近で、迫力ある動物達の姿を観察出来る。

(7) ランドスケープ型

生息地の環境（植物、水、岩山等）を重視して、生息地のランドスケープ（景観）を再現する展示方法。問題点は、動物との距離が遠すぎることとされている。

(8) 行動展示

個々の動物が本来持っている能力を最大限にひき出し来園者に見せる工夫をした展示のこと。旭山動物園では、動物達の本質的でいきいきとした、ありのままの姿を伝えたいとの飼育員の想いが「行動展示」に結実した。坂東園長は、講演の中で「いのちの営みの展示」と語った。

(9) ペンギン館

2000年9月にオープン。キングペンギン、ジェンツーペンギン、フンボルトペンギン、イワトビペンギンを飼育。円筒型で360度見渡せる水中トンネルでは、ペンギンが水中を飛ぶように泳ぐ姿を観察することが出来る。冬期間のペンギンの散歩は大人気。

(10) ブラキエーション

類人猿の多くは、下肢に比べて上肢が良く発達しており、腕を使って樹から樹へと移動する。この腕を使って移動する行動をブラキエーション（腕渡り）という。旭山動物園では、オランウータンが高さ17mの塔、シロテナガザルは高さ14mの鉄塔を腕渡りする様子を観察する事が出来る。

(11) 安佐動物園

広島市立安佐動物園。1971年に開園した西日本最大級の動物園。25.6haの広大

な敷地内にアフリカとアジアの動物を中心に約160種の動物が、檻の少ない環境で飼育・展示されている。2001年には子供が動物と触れ合えるスペースとして「びーちくパーク」を開設した。

(12) トランクライザー

精神安定剤の総称。脳に直接作用して精神活動の不安定・動揺を静穏化する。医師の処方せん無しでは入手出来ない。

(13) 介添え保育

飼育係が母親に付き添って、母親が子育てを出来るように支援する。この支援を通じて、母親としての自覚を促し、やがて母親一人で子育てが出来るようにする。生物学的に、哺乳類は母乳で子どもを育てる生き物であり、乳首を吸われることで母親（母性）のスイッチが入ると言われている。

(14) 健土健民

学校法人酪農学園の建学の精神で、黒澤西蔵（注釈（20）を参照）の唱えた言葉。「健やかな土から生み出される健やかな食物によって健やかな生命が育まれる」ということ。

(15) ベアーセンター

上川町の北の森ガーデン内にある大雪山ベアーセンターのこと。道北地方ではただ一つの熊牧場で、ヒグマが飼育されている。

(16) ネコ目

従来は食肉目と言われていたが、1988年に文部省の「学術用語集動物学編」において、目以下の名称をそれぞれの動物群を代表する動物名に変えるという改訂が行われた。改訂の趣旨は、一般人が親しみを持てる代表的な種名を冠したカタカナ表記に改めるというもので、食肉目の代表としては「ネコ」が選ばれた。

(17) 褥瘡（じょくそう）

人間（患者）や動物が長期に渡り同じ体勢で寝たきり等になった場合、体と支持面（ベッドや床）との接触部分で血行が不良となるために周辺組織が壊死を起こす状態。床ずれとも言われる。

(18) キメラ

2種類以上の異なる発生初期の胚を融合させることにより、人工的に作られる個体。2種類以上の遺伝的に異なる細胞から成る。

(19) 三愛精神

学校法人酪農学園の建学の精神。三愛精神とは、「神を愛し、人を愛し、土を愛する」ということ。酪農学園のホームページ上では「愛するとは生かすこと。互いの違いを受け入れて生かし合い、土や自然を大切に、社会に貢献することが、三愛精神の意味するところ」と説明されている。

(20) 黒澤酉蔵

1885～1982年。茨城県常陸太田市（旧久慈郡世矢村）出身の実業家、教育者。北海道製酪販売組合連合会（現在の雪印メグミルク）創業者、北海道酪農義塾（現在の酪農学園）の創立者。田中正造（注釈（21）を参照）を生涯の恩師と仰ぐ。

(21) 田中正造

1841年～1913年。栃木県佐野市小中町（旧下野国安蘇郡小中村）出身の政治家、社会運動家。明治政府の富国強兵、殖産興業政策の中で生じた足尾銅山鉍毒事件に生涯を捧げて闘った。1901年12月10日、帝国議会開院式から帰途の明治天皇に足尾銅山の操業停止を直訴。田中の行動と思想は黒澤酉蔵など多くの人々に大きな影響を与えた。「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」は、死の一年前の言葉である。

本稿は、2013年9月12日、公益財団法人秋山記念生命科学振興財団主催の特別講演会におけるお話を編集したものです。

（文責：秋山財団事務局長 宮原）



坂 東 元 (ばんどう げん)

経 歴 :

- 1961年
旭川市生まれ
- 1986年
酪農学園大学 酪農学部獣医学修士課程卒
- 1986年
同年5月 旭川市旭山動物園 就職
- 1995年
旭川市旭山動物園 飼育展示係長
- 2004年
旭川市旭山動物園 副園長
- 2008年
ボルネオ保全トラストジャパン 理事就任
- 2009年
旭川市旭山動物園 園長

平成9年の「こども牧場」から「ちんぱんじー館」「レッサーパンダ舎」「エゾシカの森」まで施設のデザインを担当、数々のアイデアを出し具体化してきた。また手書きの情報発信や、もぐもぐタイムなどのソフト面でも係の中心となり具体化、システム化を図ってきた。

2013年11月にオープンした「きりん舎」「かば館」の建築も手がけた。

ボルネオでの活動も本格化しており、マレーシア国サバ州での野生生物レスキューセンターは、2013年9月に1期工事を終了し開所式を行なった。

著 書

- 「動物と向きあって生きる」 (角川学芸出版)
- 「旭山動物園へようこそ」 (二見書房)
- 「夢の動物園」 (角川学芸出版)
- 「ゲンちゃん獣医になる」 (角川学芸出版)

など多数。

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団

賛助会員のご案内

- 当財団は、健康維持・増進に関連する生命科学(ライフサイエンス)の基礎研究を奨励し、かつ人材育成及び国際的な人材交流の活性化を促進し、その成果を応用技術の開発へ反映させることにより、学術の振興及び地場産業の育成並びに道民の福祉の向上に寄与することを目的としております。
- 具体的には、生命科学の進歩発展に顕著な功績があった研究者に対する褒賞、新渡戸稲造と南原繁が取り組んだ国際平和と教育に注いだ精神を受け継ぎ、次世代の育成に顕著な功績があった方に対する褒章、健康維持・増進に関連する生命科学諸領域の基礎研究分野に対する助成、地域社会の健全な発展を目的とする活動並びに新たな公共の担い手育成及びネットワーク構築に対する助成等です。
- 上記の事業を推進するに当たって、当財団では事業の趣旨にご賛同頂ける方々を対象とした賛助会員制度を設けております。事業の趣旨にご賛同賜り、賛助会員としてご入会下さいますよう、お願い申し上げます。
- 賛助会員の種類と会費
 - 1.個人会員 1口：年額 1万円
 - 2.法人会員 1口：年額10万円
- 特典
 - 1.財団が作成する資料(年報・文献・刊行物)を原則として無償でお送り致します。
 - 2.財団が主催する講演会等へご招待致します。
- 当財団は、賛助会費をお支払頂いた方に対して税法上の特典を受けられる公益財団法人として認定を受けております。
- 当財団に対して個人または法人が賛助会費をお支払頂いた場合には、その個人・法人ともに税法上の優遇措置を受けることが出来ます。賛助会員への税制優遇措置の概略をご説明致します。
 - 1.個人の方が会費をお支払頂いた場合
個人の方が当財団に対して2,000円を超える会費をお支払頂いた場合は、(会費金額 - 2,000円)が所得から控除されます。なお会費金額は賛助会員の総所得金額の40%相当額が限度となります。
 - 2.法人の方が会費をお支払頂いた場合
所得税の控除限度額は、(会費金額 - 2,000円)となります。
また、法人税については、以下を限度として損金算入出来ます。
(資本金等の額の0.375% + 所得金額の6.25%) × 1/2
- 当財団の事業趣旨にご賛同頂ける方々からのご入会をお待ちしております。ご不明な点につきましては、当財団事務局までお問い合わせ下さい。

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団
〒064-0952
札幌市中央区宮の森2条11丁目6番25号
TEL 011-612-3771
FAX 011-612-3380
E-mail : office@akiyama-foundation.org(事務局)

賛助会員入会申込書（個人・法人用）

本申込書はFAXまたは郵送をお願い致します。なお、原本は保管をお願い致します。

(FAX 011-612-3380、〒064-0952 札幌市中央区宮の森2条11丁目6番25号)

年 月 日

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団

理事長 秋山孝二 殿

貴財団の趣旨に賛同し、賛助会員として下記の通り入会を申し込みます。

法人の方は(※)の項目も、ご記入下さい。

種 別		加 入 口 数	年 会 費
賛 助 会 費	<input type="checkbox"/> 個 人	(1口:10,000円) □	円
	<input type="checkbox"/> 法 人	(1口:100,000円) □	円
法人・団体名(※)			
ご氏名(代表者名)	Ⓔ		
ご住所(所在地)	〒 ー		
ご担当者の 所属・役職・氏名 (※)			
電話番号	()	ー	
F A X	()	ー	
E-mail			
振 込 先	お振込みの場合は、下記の金融機関宛となります。 ・郵便振替口座 02790-2-21955 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団 ・北海道銀行 鳥居前支店 普通口座 0979033 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団		

お問い合わせ：TEL 011-612-3771 E-mail : office@akiyama-foundation.org (事務局)

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団

ご寄附をお寄せくださる方に

- 当財団は、健康維持・増進に関連する生命科学(ライフサイエンス)の基礎研究を奨励し、かつ人材育成及び国際的な人材交流の活性化を促進し、その成果を応用技術の開発へ反映させることにより、学術の振興及び地域産業の育成並びに道民の福祉の向上に寄与することを目的としております。
- 具体的には、生命科学の進歩発展に顕著な功績があった研究者に対する褒賞、新渡戸稲造と南原繁が取り組んだ国際平和と教育に注いだ精神を受け継ぎ、次世代の育成に顕著な功績があった方に対する褒章、健康維持・増進に関連する生命科学諸領域の基礎研究分野に対する助成、地域社会の健全な発展を目的とする活動並びに新たな公共の担い手育成及びネットワーク構築に対する助成等です。
- 上記の事業を推進するに当たって、保有株式の配当金と皆様からの寄附金並びに基本財産の運用による利息収入により行われております。
- 当財団は、ご寄附を賜った方に対して税法上の特典を受けられる公益財団法人として認定を受けております。
- 当財団に対して個人または法人が寄附を行った場合には、その個人・法人ともに税法上の優遇措置を受けることが出来ます。寄附者への税制優遇措置の概略をご説明致します。
 - 1.個人の方が寄附される場合
個人の方が当財団に対して2,000円を超える寄附を行った場合は、(寄附金額 - 2,000円)が所得から控除されます。なお寄附額は寄附者の総所得金額の40%相当額が限度となります。
 - 2.法人の方が寄附される場合
所得税の控除限度額は、(寄附金 - 2,000円)となります。
また、法人税については、以下を限度として損金算入出来ます。
(資本金等の額の0.375% + 所得金額の6.25%)× 1/2
- 当財団の事業趣旨にご賛同頂ける方々からのご寄附をお待ちしております。ご不明な点につきましては、当財団事務局までお問い合わせ下さい。

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団

〒064-0952

札幌市中央区宮の森2条11丁目6番25号

TEL 011-612-3771

FAX 011-612-3380

E-mail : office@akiyama-foundation.org(事務局)

寄 附 金 申 込 書 (個人用)

本申込書はFAXまたは郵送をお願い致します。なお、原本は保管をお願い致します。

(FAX 011-612-3380、〒064-0952 札幌市中央区宮の森2条11丁目6番25号)

年 月 日

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団
理 事 長 秋 山 孝 二 殿

貴財団の趣旨に賛同し、寄附致します。

金 額	金 円也
ご 氏 名	Ⓜ
ご 住 所	〒 ー
電話番号 F A X E-mail	() ー () ー
寄 附 金	該当する項目に○印をお付け下さい。 ■寄附の種類：現金、その他() ■納付方法：お振込み、手渡し、郵送 お振込みの場合は、下記の金融機関宛となります。 ■郵便振替口座 02790-2-21955 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団 ■北海道銀行 鳥居前支店 普通口座 0979033 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団
納付日(予定)	年 月 日
領 収 書	領収証を希望される方は送付先のご記入をお願い致します。 該当する方に、○印をお付け下さい。 ()上記と同じ氏名と住所宛 ()上記とは別の氏名と住所宛 ご氏名【 】 ご住所【 〒 】

お問い合わせ：TEL 011-612-3771 E-mail：office@akiyama-foundation.org(事務局)

寄 附 金 申 込 書 (法人用)

本申込書はFAXまたは郵送をお願い致します。なお、原本は保管をお願い致します。

(FAX 011-612-3380、〒064-0952 札幌市中央区宮の森2条11丁目6番25号)

年 月 日

公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団
理 事 長 秋 山 孝 二 殿

貴財団の趣旨に賛同し、寄附致します。

金 額	金 円也
法人・団体名	
代表者名	印
所在地	〒 ー
ご担当者の 所属・役職・氏名	
電話番号 F A X E-mail	() ー () ー
寄 附 金	該当する項目に○印をお付け下さい。 ■寄附の種類：現金、その他() ■納付方法：お振込み、手渡し、郵送 お振込みの場合は、下記の金融機関宛となります。 ■郵便振替口座 02790-2-21955 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団 ■北海道銀行 鳥居前支店 普通口座 0979033 □座名 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団
納付日(予定)	年 月 日
領 収 書	領収証を希望される方は送付先のご記入をお願い致します。 該当する方に、○印をお付け下さい。 ()上記と同じ氏名と住所宛 ()上記とは別の氏名と住所宛 法人名【 】 住 所【〒 】

お問い合わせ：TEL 011-612-3771 E-mail：office@akiyama-foundation.org(事務局)

秋山財団ブックレットNo.22

「いのちをつなぐ 未来のために ～ 伝えるのはいのちの輝き ～」

発 行 日 ◆ 2015年 5 月29日

発 行 人 ◆ 秋 山 孝 二

発 行 ◆ 公益財団法人秋山記念生命科学振興財団
札幌市中央区宮の森 2 条11丁目 6 番25号
phone (011)612-3771 fax (011)612-3380

E-mail office@akiyama-foundation.org

U R L <http://www.akiyama-foundation.org/>

印刷・製本 ◆ 株式会社須田製版

刊行のことば

本年、秋山記念生命科学振興財団は、設立八年目を迎えました。

この間の財団助成事業を通じて特に感じますことは、近年、生命科学に関する基礎研究の潮流が、国内外に於て大きなうねりとなって動き始めていることとございます。

生命科学（ライフサイエンス）は心の問題を含め、人類の幸せを目指す「いのちの科学」であり、その領域は自然科学の分野のみならず、哲学までも含む人文科学、更には社会科学をも視野に入れた学問であると理解しております。

今後、環境・食糧・エネルギー・高齢化等人類共通で地球規模的諸問題の解決が迫られる中で、生命科学は、後世に続く生きとし生けるものの「いのち」にかかわる思想と科学技術を目指す学問として、ますます重要な役割を担うものと期待されております。

本財団は、北海道に於ける生命科学振興に些かなりとも寄与することを念願して設立されましたが、研究者に対する助成事業のほか、広く一般の方々にも少しでも多く「いのちの科学」という大きな問題に関心をもっていただくことを期待しております。

このような考えに基づいて、当財団では平素色々とお力添えをいただいております各先生方の生命科学に関するご高説をまとめ、秋山財団ブックレットシリーズとして発刊することにいたしました。

以上の財団の趣旨をご理解の上、本書を広く各位にお目通しいただき、ご高見を賜れば幸甚の至りに存ずる次第でございます。

平成5年9月

財団法人秋山記念生命科学振興財団

秋山財団ブックレット バックナンバー

- No.1 「生命の長さとは質」 (1993・9・1)
日野原 重明 聖路加看護大学学長
- No.2 「人間にとって心とは」 (1994・4・1)
小林 登 国立小児病院院長
- No.3 「若き生命科学研究者に期待する」 (1994・10・1)
石塚 喜明 北海道大学名誉教授
- No.4 「研究雑感」 (1995・6・30)
岡田 善雄 千里ライフサイエンス振興財団理事長
- No.5 「ほんものの医療を創る」 (1997・6・30)
坂上 正道 北里大学名誉教授
- No.6 「生命を育む情報」 (1998・3・31)
宇井 理生 東京臨床医学総合研究所所長
- No.7 「医学と医療のはざま」 (1999・1・31)
村上 陽一郎 国際基督教大学教授
- No.8 「脳科学から見る21世紀」 (2000・5・31)
伊藤 正男 理化学研究所脳科学総合研究センター所長
- No.9 「アレルギーの話」 (2001・2・28)
宮本 昭正 日本臨床アレルギー研究所所長
- No.10 「21世紀の長寿社会と我々の心身の健康」 (2002・3・31)
木谷 健一 国立療養所中部病院長寿医療研究センター
特別客員研究員 (前センター長)
- No.11 「20世紀後半からの発生工学の進展」 (2002・11・30)
－人工授精からクローン技術まで－
入谷 明 近畿大学理事 生物理工学部教授
- No.12 「鳥の渡りと地球環境の保全」 (2004・3・31)
樋口 広芳 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
- No.13 「現代社会がもたらすエマージング感染症」 (2004・11・30)
－とくに人と動物の共通感染症について－
山内 一也 東京大学 名誉教授
日本生物科学研究所 主任研究員
- No.14 「持続可能で豊かな社会を展望する」 (2006・3・20)
瀬戸 昌之 東京農工大学農学部 教授
- No.15 「湿地と貧困」 (2007・2・10)
辻井 達一 国際湿地保全連合 理事
財団法人北海道環境財団 理事長

- No.16 「公益を担うこれからの民の役割」 (2008・3・17)
高橋陽子 社団法人日本フィランソロピー協会 理事長
- No.17 「『がん哲学』に学ぶ」 (2009・5・29)
－クラーク精神の継承：新渡戸稲造・南原繁－
樋野興夫 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授
- No.18 「「強い人」と「弱い人」がともに生きられる社会とは」 (2010・2・5)
香山リカ 立教大学現代心理学部映像身体学科 教授
- No.19 「幕末・維新、いのちを支えた先駆者の軌跡」 (2011・5・24)
～松本順と「愛生館」事業～
片桐一男 青山学院大学 名誉教授
- No.20 「世界を知る力 日本創生」 (2012・2・29)
寺島実郎 財団法人日本総合研究所理事長
多摩大学学長
三井物産戦略研究所会長
- No.21 「生命(いのち)と向き合う科学を求めて
－生命誌の視点からの北海道への期待－」 (2013・3・31)
中村桂子 JT生命誌研究館 館長

※演者の肩書きは講演当時のものである

※ ()内の数字は当該ブックレット発行日



公益財団法人

秋山記念生命科学振興財団

THE AKIYAMA LIFE SCIENCE FOUNDATION